

FLORA KANAGAWA

Apr. 25, 2002 No. 52

神奈川県植物誌調査会ニュース第52号

〒250-0031 小田原市入生田499 県立博物館内 神奈川県植物誌調査会

TEL 0465-21-1515・FAX 0465-23-8846

e-mail katsu@pat-net.ne.jp

郵便振替 00230-5-10195



ヒメハッカ. 詳しくは本文612ページを参照.

秋山幸也: 桐生亮コレクションからヒメハッカを発見	612
浜口哲一: メッシュ担当者のこれからの提案	612
堀内 洋: 神奈川県植物誌2001カヤツリグサ科への補遺及び正誤	613
堀内 洋: 神奈川県植物誌2001バラ亜科への正誤及び補遺	620
河津英子: 植物誌2001刊行後のセリ科の訂正および追加	628
金井弘夫: 相模湖のツガ	630
田中徳久・勝山輝男・木場英久: 「神奈川県植物誌2001」で新たに記録された植物と絶滅した植物	631
事務局: 2001年度総会報告	633
事務局: 『神奈川県植物誌2001』の正誤表の入手方法	634

桐生亮コレクションからヒメハッカを発見

(秋山幸也)

相模原市立博物館には、故桐生亮氏が教職の傍ら、あるいは相模原市民俗資料室非常勤職員時代の1930年代～80年代に収集された植物標本、2,900点余りが収蔵されている。これらは昆虫類のコウチュウ目、チョウ目の膨大な標本目録とあわせて、昨年3月、「桐生亮コレクション標本目録」として当館から刊行された。

恥ずかしながら、この編集作業の中では気が付かなかった県内絶滅種、シソ科のヒメハッカ *Mentha japonica* の標本が同コレクションの中から発見された。これは、現在進めている標本庫の整理作業にあたっている相模原ブロック会員らによって確認されたものである。

この標本は1956年9月2日、相模原、大野・鹿沼採集となっている。鹿沼は現在、JR横浜線淵野辺駅南口側の鹿沼公園として整備されているあたりと見られ、当時は草地の中にぽっかりと池があるような景観であったという。

なお、桐生亮コレクションについては、「神植誌2001」へのデータ登録が間に合わず、本文記載にも分布図にも反映されていない。コレクションおよび標本庫を管理している筆者の認識不足もあり、ハッカ属執筆担当者への照会もしていなかった。

ヒメハッカは、「神奈川RDB」では絶滅種、「国RDB00」では絶滅危惧Ⅱ類にカテゴライズされている。50年近く前の記録ではあるが、県内の採集で、県内に存在する貴重な標本として早急に公表すべきと判断し、遅きに失した感はあるがここに報告する。標本の同定に際し、支倉千賀子氏にご教示をいただいた。ここに謝意を表します。

標本:(相模原)大野・鹿沼 1956.9.2 桐生亮 SCM2379.

メッシュ担当者のこれからのための提案

(浜口哲一)

植物誌2001が完成し、一息も二息も入れているこの頃だが、こうした生きものの調査は長く続けていくことに大きな意味があると考え、と、そろそろ次のステップに踏み出さねばなら

ないだろう。

メッシュ担当者がいて、同じ地域を見続ける人材がネットワークされているという利点をいかしていくにはどうしたらよいか、いくつかのことを考えてみたので、皆さんのご意見を伺いたいと思う。

①希少種の動向追跡

県内での希少種、あるいは地区やメッシュにおける貴重な種類をリストアップし、それぞれの産地での現存を毎年確認していく。たとえば、「高麗山のコバノボタンヅル」とか「真鶴半島のイワタイゲキ」といったものが対象になるだろう。そして毎年、開花株があったかどうかを必ず見に行くようにする。対象を多めにするのができれば、そうした個体群が減少したり、絶滅に向かうのにはどんな要因が大きく働くかという点についても事例を集めることができるだろう(実際にそうしたケースがあった時に、保護の動きをするかは別問題として・・)。

②花ごよみ作りを通じたモニタリング

今までの植物誌調査では、20年間という短い時間に関わらず大きな分布の変化を示した種があった。その多くは帰化植物だが、ウラジロチチコグサ・マメカミツレなどの分布拡大の早さには目を見張るものがあった。そうした分布の動向は、今回は標本による分布点という形で示されたが、地理的な分布の変化はある程度示せるとしても、量的な変化は示せない。また、いったん分布が広がってしまうと、それ以上の追跡を標本を通して行うのは、実際問題としては無理であろう。また、ブタクサのように普通種であったのに減ってきている種の動向は、標本がなかったとしても、それが減ったためか、見慣れたためかの区別はつかない。

そこで、考えた方法は次のようなものである。各自、500m～1km程度の調査ルートを決め、毎月1回、そのルートを歩き、開花が観察された植物の種類を記録していく。つまり花ごよみ作りである。調査はなるべく大勢の会員が参加し、可能な限り多くのルートで行い、年末になったら一覧表の形で報告する。そして、それぞれの種類の調査ルート数に対する出現率をその種の分布の広がりや個体数の多さの指標と考える。つまり、100ルートの調査ができたとして、2001年には20ルートで記録された種が、

2010年で80ルートで記録されるようになれば、4倍多くなったと考えたらどうだろうかというのである。

もちろん花ごよみとしてまとめること自体から読みとれる情報もいろいろあるだろうし、何より気軽に多くの人を取り組める調査である点が良いのではないかと思う。

③新しい分布の記録

①②のような調査を行っているとき、メッシュ内を歩くチャンスができる。その道筋では、そのメッシュで新産となる種に目配りすることや、その標本作製も怠らないようにする。もちろん積極的にメッシュ内を巡回することも行うべきであるが、③ばかりに気をとられていると、身近な植物の動向を見逃しがちになる。そこで②のような方法も提案してみたわけである。

これらの取り組みの中で、特に②については記録の取り方について、共通のマニュアルを作る必要がある。草だけにするか木も含めるか、コースの長さや記録をとる道幅をどのくらいにするか、記録用紙や報告のフォーマットをどうするかなど検討すべき課題が多いし、おそらくモデルにすべき前例もない。そこで、2002年はその方法を検討するというにしたいのだが、どなたか一緒に考えてみようという方がいらっしやらないだろうか。興味のある方は、年内に浜口まで連絡を頂ければと思う。とりあえず、仮のマニュアルを作って調査を始め、いろいろ問題点を出し合いながら検討を加えていくことにしたいのだが・・・

神奈川県植物誌2001カヤツリグサ科への補遺及び正誤

(堀内洋)

『神奈川県植物誌2001』(以下、植物誌と略す)に訂正、補足すべき事項や新知見があるので報告する。コピーして植物誌の当該ページにはさんでいただくと幸いである。なお、2002年2月1日発行の「神奈川県植物誌2001正誤表」に取り上げた事項のうち主要なものも本報告に含めた。

1. 科全体の地下部の形態記載について

カヤツリグサ科植物でも広義テンツキ、アオスゲ類、ナキリスゲとセンダイスゲ等は地下部の形態が分類群を判断する際の重要な形質であ

る。筆者の経験上、既存の図鑑類ではこれらの記述が判り辛く、同定が困難なばかりか、時に誤同定のもととなることもあった。植物誌では地下部の形態記載をカヤツリグサ科の共同著者である勝山、北川両氏のご了解を得て工夫し、全体を統一して書くことに努めた。直立根茎、横走根茎、匍匐根茎、匍枝など植物誌で用いた地下部の形態用語は清水・梅林(1995)を参考に堀内が定義し、筆者らが知る範囲で極力記載に努めたが、肝心の用語に関する説明を入れ忘れた。これらの用語は専ら成長様式や繁殖様式に着目したものであり、近縁分類群の区別を明確にして、植物誌の各論でも論じているように分類群の大きさを判断する根拠としても使用しているのであるが、用語の出典が無くかえって判りづらくしてしまったと思う。ここにお詫びするとともに用語解説をしておく。植物誌の地下部の形態に関する記載は不完全であるので、今後とも観察を続け、より完全なものになりたい。

(1) 根茎: 地下部にある普通茎。植物誌では専ら次の3つの用語を用いている。

1) 直立根茎: 根茎のうち垂直に伸びるもの。植物誌であつかったカヤツリグサ科植物では、叢生するもので外部から明らかな根茎が認められないものは、概ねこの直立根茎を持つ。外部から明らかな根茎が認められないのは節間が極短いため根茎自体も短く殆ど外部からは伺い知れないためである。県内産のカヤツリグサ科植物では、ハタガヤ属、カヤツリグサ属・テンツキ属の1年生の分類群の多く、セイタカハリイ〜ミツカドシカクイのハリイ属ハリイ列(*Ser. Multicaules* Svenson)に属する分類群、スゲ属で叢生する多くの分類群等はこの直立根茎を持つ。スゲ属植物では、土砂や落ち葉などに急に埋没すると、しばしば急速に成長し節間が間延びして長くなり横走根茎状を呈することがあるので注意が必要である。

2) 横走根茎: 清水・梅林(1995)は横走根茎を典型根茎と匍匐根茎とに二分しているが、植物誌では典型根茎のみを横走根茎と定義した。通常の株の成長に伴い徐々に根茎が水平方向に発達し、根茎に鱗片葉は無いことが多く、ほぼ等しい太さと規則正しい節間を保って伸び、根茎に地上茎や枯死した地上茎の残存物が付いていることがあり、根茎自体に宿存性があるこ

とが多い。地上部は叢生或いは地上茎が一行に並ぶものが多い。身近な植物ではワサビの地下部をイメージしていただくと良いと思う。丁寧に採集・作成された標本では前年以前の根茎や枯死した地上茎等が残っている場合が多く判りよい。県内産のスゲ属植物ではメアオスゲなどに普通に見られ、ミヤマカンスゲ・オクノカンスゲ・ナキリスゲ等の大株にも認められる。分類の難しいアオスゲ類では、アオスゲが叢生して直立根茎を持つのにに対し、メアオスゲが横走根茎を持つという根本的な成長様式の違いがある。また、県内産のカンガレイ類は叢生状を呈することが多いが本質的には横走根茎を持つと考えられ、大株となったタタラカンガレイではしばしば横走根茎が目立つ。

3) 匍匐根茎: 清水・梅林(1995)のいう横走根茎から典型根茎を除いたもの。通常の成長に伴い発達し、根茎の節間が長く伸びるので地上茎の間隔が空き、しばしば根茎に鱗片葉が認められる。次の匍枝と紛らわしく、植物誌でも判断に苦しんだ。県内産では、ヒメクグ属、コアゼガヤツリ、セイタカハリイ〜ミツカドシカクイのハリイ列を除くハリイ属、ウキヤガラ属、シズイ、サンカクイ、フトイ、ヒメシラスゲ節、アゼスゲ、カサスゲなど多くの種に見られるが、テンツキ属には認められない。ハリイ属で匍匐根茎をもつものは後に根茎の節より茎を叢生し株となり基部に直立根茎や短い横走根茎を生じることが多い。

(2) 匍枝: 清水・梅林(1995)が指摘するように日本でも匍枝や走出枝等の幾つかの用語があり地表性のものを含め色々な定義がなされている。植物誌では根茎から栄養繁殖を目的に地下部に生じ、比較的短期間に伸びるツル状のものを匍枝とした。一般に根茎より細くて節間も長いものが多く、しばしば先端に塊茎を付ける。県内産では、ハマスゲ・ショクヨウガヤツリ・ミズガヤツリ等の先端に塊茎を作る多年生カヤツリグサ属、クログワイの塊茎に接続する部分、ミツカドシカクイ、オクノカンスゲ・コミヤマカンスゲ・ハマアオスゲ等のヌカスゲ節の幾つかの種、センダイスゲ等に認められるとみなしたが、テンツキ属には認められなかった。ツルナシコアゼガヤツリで短い匍匐根茎および短い根茎としたものは匍枝に当たる可能性もある。匍枝は匍匐根茎とは異なり分類群により

生じる季節が決まっていることが多いように思う。ツルミヤマカンスゲではやや地上性になる。植物誌のカヤツリグサ属の検索表でハマスゲ、ショクヨウガヤツリ、オニガヤツリ、ミズガヤツリに関連した3箇所(p.398下から4行目、p.399上から14行目及び下から1行目)で匍匐根茎となっているが、これは匍枝の誤りである。ハマアオスゲは匍枝を伸ばし栄養繁殖を行うが、株自体は叢生し直立根茎を持つ。

なお、上記で各用語について個別に解説したが、分類群の中にはこれらを複合して持っている(=複合根茎)ものがある。匍匐根茎の項で例示したハリイ属の一部、匍枝の項で例示したハマアオスゲがそれである。

2. 植物誌に追加した図版の元とした標本について

植物誌で今回追加した以下の図版は神奈川県産の標本を元に描いた。植物誌では紙面の関係もあり省略したが参考の為ここに記しておく。タチヒメクグ(全図): 箱根町お玉が池 1984.9.2 勝山輝男 KPM-NA1075378。

アゼテンツキ(果実): 横浜市緑区台村町 1979.7.13 勝山輝男 KPM-NA1076621。

メアゼテンツキ(果実): 海老名市杉本小 1984.9.13 森百合子 KPM-NA1076630。

テンツキ(花序): 横浜市都筑区牛久保町 1987.9.6 小崎昭則 KPM-NA1076513。

クグテンツキ(花序): 三浦市黒崎 1989.10.7 勝山輝男 KPM-NA1102388。

ヒメハリイ(クロハリイ形の果実): 横浜港北 1967.5.8 宮代周輔? YCB038705。

スズマハリイ(果実と小穂の鱗片): 横浜市港北区牛久保町 1988.8.14 小崎昭則 KPM-NA1100609。

オオハリイ(果実): 川崎市麻生区早野霊園奥休耕田 1989.7.8 北川淑子 KPM-NA1100787。

ハリイ(果実): 横浜市戸塚区舞岡町 1992.7.25 勝山輝男 KPM-NA1104936。

シカクイ(全図): 横浜市戸塚区舞岡町 1992.7.25 勝山輝男 KPM-NA1104937。

ミツカドシカクイ(全図): 箱根町仙石原早川付近 1989.8.7 勝山輝男他 KPM-NA1076403。

タタラカンガレイ(茎の横断面, 果実): 横浜市都筑区牛久保町 1987.9.6 小崎昭則 KPM-NA1076796。

ハタベカンガレイ(全図): 箱根町仙石原 1992.9.2 小崎昭則 KPM-NA1105273。

3. ヒメクグの産地

東京大学総合研究博物館に県内産の以下の2標本がある。植物誌の分布図を見ると付近に打点がないので参考までに取り上げておく。

証拠標本:武州登戸の田圃 1947.9.21 水島正美 TI;
相模横浜白楽 採集年判誌不可 10月 山崎敬 TI.

4. チャガヤツリ(狭義)の異名

Cyperus krameri Franch. & Sav. は Enum. Pl. Jap. 2(1): 104 (1877) で裸名の新学名が示され, Enum. Pl. Jap. 2(2): 538 (1878) で新変種 *Cyperus textori* β. *laxa* Franch. & Sav. の異名とされた。C. *krameri* Franch. & Sav. もチャガヤツリ(狭義)の異名であるので, 植物誌のチャガヤツリ(狭義)の標題を以下のように変更する。

「†(1a)チャガヤツリ(狭義) *Cyperus amuricus* Maxim. var. *amuricus*; C. *krameri* Franch. & Sav., Enum. Pl. Jap. 2(1): 104 (1877) 及び C. *textori* Miq. β. *laxus* Franch. & Sav., Enum. Pl. Jap. 2(2): 539 (1878) の基準産地は横須賀(Savatier-2888bis); C. *amurico-compressus* T. Koyama, pro. hybr., syn. nov.」

5. アオチャガヤツリの学名, 県外新産地及び形態について

Nakai(1933)は *Cyperus pterygorachis* C.B. Clarke をチャガヤツリ *C. amuricus* Maxim. に近縁な別種とし, より分枝した花序を持ち, 花軸はより広い翼状で, 小穂の鱗片はより緑がかり, 灰色がかった瘦果をもつことで区別できるとしている。和歌山県新宮市産のアオチャガヤツリの標本と各地のチャガヤツリの標本とを比較したところ, 1花序枝につく小穂はアオチャガヤツリの方が密で数が多く, 花軸(各小穂の鱗片や瘦果のつく軸の部分)及び花序枝の小穂が付く軸の部分ともアオチャガヤツリの方がやや広い翼状であり, 小穂鱗片は緑色で, 瘦果表面はチャガヤツリに比べやや灰色がかっているなど, Nakai(1933)の記述に合致した。Ohwi(1931)は *Cyperus amuricus* Maxim. var. *pterygorachis* (C.B. Clarke) Ohwi という新組み合わせを行い, これにアオチャガヤツリという新和名を与え, 新潟県, 和歌山県, 兵庫県に標本を引用しているが, 母変種との違いを明らかにしていない。C. *pterygorachis* の原記載や基準標本等を確認する必要があるが, アオチャガヤツリが C. *pterygorachis* である可能性を指摘しておきたい。なお, C. *pterygorachis* の種形容語は「翼のある花軸」の意味である。

東京大学総合研究博物館収蔵のチャガヤツ

リのジーナスカバーから伊豆大島で採集されたアオチャガヤツリの標本を見出した。この標本では小穂の鱗片の長さ(芒を含む)2.2-2.5mm程, 鱗片の芒の長さ0.6mm程で植物誌の測定値より大きめであった。

証拠標本:伊豆大島黒潮小屋-行者窟-観測所 1950.8.13 水島正美 TI.

6. ミズハナビの県内の記録

Kükenthal(1935-1936)に "*Cyperus tenuispica* Steud." の標本引用として "Nippon, bei Yokohama (Naumann!)" が挙げられている。Kükenthal(1935-1936)は記載や図から判断すると "*Cyperus tenuispica* Steud." にミズハナビを, "*Cyperus haspan* L." にコアゼガヤツリとツルナシコアゼガヤツリとをあてていたと考えられるが, ミズハナビとツルナシコアゼガヤツリを正確に認識・区別していたかは不明である。標本を確認する必要があるが, 植物誌の調査では横浜周辺の記録を見いだせなかったこともあり, 参考までに取り上げておく。

7. 三浦半島産のクグテンツキについて

三浦半島黒崎産のクグテンツキは, 植物誌で示したように外見上頭状に小穂群が群がり典型的なクグテンツキとは異なる型である。再度調べたところ雄しべが2個に3個が混じる(クグテンツキは2個)など, 本州産の一般的なクグテンツキと異なることが判った。品種レベルで区別できる可能性があるので産地にちなみミウラクグテンツキと仮称しておく。植物誌のクグテンツキとした花序の図はミウラクグテンツキである。

証拠標本:三浦市黒崎 1989.10.7 勝山輝男 KPM-NA1102388, 三浦市黒崎 1989.10.7 勝山輝男 KPM-NA1102389.

8. メアゼテンツキの学名

メアゼテンツキの表題に用いた学名が間違っていた。下記のように訂正しお詫びする。
「*Fimbristylis verata* R.Br.」→「*Fimbristylis velata* R.Br.」

9. 広義ホタルイ属の属を細分化した場合の学名の正誤等

学名については正確を期するように気をつけていたが, 早坂(2001)を見て広義ホタルイ属に属する以下の種について間違いに気がついた。その他, 幾つか変更したい点もあるので, 以下のように訂正しお詫びする。

「(6)ウキヤガラ *Scirpus yagara* Ohwi; *Bolboschoenus yagara* (Ohwi) Y.C. Yang & M.Zhan; *Bolboschoenus fluviatilis* (Torr.) Soják subsp. *yagara* (Ohwi) T.Koyama」

「(8)イセウキヤガラ *Scirpus planiculmis* F.Schmidt; *Bolboschoenus planiculmis* (F.Schmidt) T.V.Egorova; *Scirpus iseensis* T.Koyama & T.Shimizu」

「(9)シズイ *Scirpus nipponicus* Makino; *Schoenoplectus nipponicus* (Makino) Soják」

「(15)ホタルイ *Scirpus hotarui* Ohwi; *Schoenoplectus hotarui* (Ohwi) Holub; *Schoenoplectus juncooides* (Roxb.) Palla subsp. *hotarui* (Ohwi) Soják」

10. セフリアブラガヤとイワキアブラガヤとの関係

植物誌では刺針状花被片の形質の変異幅が不明なため、セフリアブラガヤとイワキアブラガヤとが同一分類群の可能性があったとした。福岡県の筒井貞雄先生より福岡県福岡市背振ダム周辺及び宗像市大井ダムで採集された複数のセフリアブラガヤの標本をお送りいただいた。比較したところ、小穂の鱗片や刺針状花被片の形質、花序からの芽生する様子等から、福岡県産のものは神奈川県で採集されたものと同一であり、かつ刺針状花被片の形質は安定していて変異は殆ど無いことが判った。

東京大学総合研究博物館で*Scirpus hattorianus* MakinoのIsotypusのスタンプが押された3枚他1枚の計4枚の標本を確認した。Isotypusとされた3枚は標本が若くて、充実した果実が認められなかったものの刺針状花被片はセフリアブラガヤより明らかに長く、未熟ながら瘦果の1/2前後あるものが認められた。他1枚は種子散布期も終わりに近づいた標本で殆どの瘦果が落ちていたが、残っている少数の果実を観察したところ、やはり刺針状花被片は瘦果の1/2前後あった。これら4点の標本はイワキアブラガヤの発見者、服部保義氏により採集されたものである。基準標本と同一個体或いは同一個体群から採集された可能性が高く、イワキアブラガヤの変異を知るには不十分かも知れないが、刺針状花被片の形質は安定しており、微細な形質の差ながら福岡県や神奈川県でセフリアブラガヤと識別が可能であった。

Schuyler(1967-a, 1967-b)は刺針状花被片などの形質の差違、イワキアブラガヤの方が開花期が2週間ほど早い点、両者の推定雑種が不稔で

ある点等から、植物誌でセフリアブラガヤにあてた*S. georgianus* R.M.Harperとイワキアブラガヤを別種としている。確実を期すためには両者の基準標本を比較すると共に、北米大陸のイワキアブラガヤ、セフリアブラガヤ及び近縁な分類群の標本を十分量比較検討した上で結論を出すべきと考えるが、東大の標本等との比較やSchuyler(1967-a, 1967-b)を読む限り両者は全く同一とは思えない。以上の理由から現時点での取り扱いとして両者を別種として扱い、植物誌のセフリアブラガヤの標題から「; ?イワキアブラガヤ *S. hattorianus* Makino」を削除する。

なお、筒井先生からの私信によれば、2001年夏現在、セフリアブラガヤの最初の発見地では殆ど姿を消しているものの、10m程離れた場所に小群があるとのことで、発見地周辺に細々であるが定着しているようである。また、東大のIsotypusのスタンプが押されたイワキアブラガヤの標本のうち1枚には服部氏から本田正次博士宛の手紙が台紙に貼られており、これを読むと当初牧野博士はタマススキという和名を用意していたと考えられる。

11. タタラカンガレイの学名と分布域について

タタラカンガレイを狭義ホタルイ属とする適切な学名がないこと等から、植物誌では広義ホタルイ属を用い属の細分化をおこなわなかった。その後、タタラカンガレイを狭義ホタルイ属(=フトイ属)として扱う学名*Schoenoplectus mucronatus* (L.) Palla var. *tataranus* (Honda) K.Kohno, Iokawa & Daigoboが発表された。植物誌でも述べたようにタタラカンガレイ、ヒメカンガレイ、*Scirpus mucronatus* L.の関係は必ずしも明らかでなく、最終的にはヨーロッパ産の*Scirpus mucronatus*の標本と比較検討する必要があると考えている。しかし、狭義ホタルイ属の学名があるのは便利であるので、現時点で広義ホタルイ属を細分化する場合のタタラカンガレイの学名として*Schoenoplectus mucronatus* var. *tataranus*を便宜的に用いたい。また、植物誌では*Scirpus mucronatus* L.の品種の見解を第一にあげたが、*Scirpus mucronatus* L.そのものとの関係が判らないのでタタラカンガレイの原記載通り変種ランクの学名を第一にあげ、あえて学名に対する判断をおこなわないこととする。従って、タタラカンガレイの標題を以下のように変更する。

「(12)タタラカンガレイ *Scirpus mucronatus* L. var.

tataranus Honda; *Schoenoplectus mucronatus* (L.) Palla var. *tataranus* (Honda) K.Kohno, Iokawa & Daigobo; *Scirpus mucronatus* L. form. *tataranus* (Honda) T.Koyama; ? *Scirpus mucronatus* L.]

また、植物誌で示した「九州(阿蘇地方)」の分布は佐藤・今江(1990)の文献引用によった。Kohno et al.(2001)にロッカクイ *Schoenoplectus mucronatus* (L.) Palla var. *ishizawae* K.Kohno, Ioka & Daigoboが九州(福岡県)に記録されていることから九州でのタタラカンガレイの分布に疑問を持っていた。前出の筒井先生からの私信で佐藤・今江(1990)のタタラカンガレイ(の少なくとも一部)はロッカクイであるとお教えいただくとともに、佐藤氏が採集したタタラカンガレイと同定され後に筒井先生がロッカクイと同定された標本をお送りいただいた。この標本を確認したところ筒井先生の同定通りロッカクイであった。阿蘇地方にタタラカンガレイがないとは完全には言い切れないが、現時点では確実な標本を見ていないので、植物誌のタタラカンガレイの分布域から「九州(阿蘇地方)」を削除する。

ロッカクイ 証拠標本: 熊本県阿蘇郡南小国町満願寺 1986.8.31 佐藤千芳 佐藤1850.

12. ハタベカンガレイについて

前出の筒井先生から植物誌のハタベカンガレイの果実の図は九州の阿蘇地方の個体群に比べ刺針状花被片が長いのではないかというご指摘を頂いた。事実、堀内が確認した阿蘇地方の標本では同一果実内の刺針状花被片が瘦果よりやや短い～若干高いという範囲内であるのに対し、箱根産の描画した果実では同一果実内の大半の刺針状花被片が瘦果より明らかに長くなっていた。佐藤・前田(2001)の記述や図を見ると阿蘇地方の個体群の刺針状花被片は瘦果と同高～若干長いものが同一果実内に混在している。小崎(1992)は箱根産(と恐らく阿蘇地方産)で瘦果とほぼ同長としている。東京大学総合研究博物館で3枚の標本を見出した。うち1枚は早田文蔵が1925年8月28日に箱根仙石原で採集した標本で、今までに確認された県内最古のハタベカンガレイの標本と思われる。各標本とも数個の果実を見たにすぎないが、箱根産の標本では果実は刺針状花被片が7本あり植物誌の図と同様に全て瘦果より明らかに長かった。採集地不明の標本では花被片が6本のもの7本ものがあり瘦果と同高～や

や長い、三段峡産の標本では6本で瘦果と同高～やや長いものであった。残念ながら十分なサンプル量に基づく各地の個体群の比較が出来ていないため、阿蘇地方、箱根のみならず全国規模での変異幅が判らない。ハタベカンガレイは各地に隔離して分布しているので産地により若干の形態的な差異が生じている可能性もある。現在の知見では刺針状花被片の長さをもとに分類群を区別すべきか判断が付かない。また、刺針状花被片の本数や柱頭の分岐数(2或いは3)の比率などを含めて、同一株や同一産地でも変化があるようで、これらの形質にばらつきがあることがハタベカンガレイの分類群としての特徴である可能性もある。以上の点は、知見の不十分さと紙面の関係から植物誌では敢えて触れなかった点であるが、ご指摘を受けたこともあり補足しておく。

証拠標本: Sengokubara 水中 1925.8.28 B.Hayata TI; 三段峡 1931.8.6 津山尚 TI; 採集地不明 1885.8.21 採集者不明 TI.

13. ヒメホタルイの分布域とコツブヒメホタルイの学名について

植物誌では琉球の分布に「？」をつけた。これは執筆時に筆者が把握していた琉球での記録が、初島(1990)による「石垣(小山による)」という引用的表現のみであったためである。その後、Walker(1976)に"MIYAKO: (T.Tomori,-URO)"と具体的に証拠標本が引用されているのを知った。この証拠標本を確認していないが、Walker(1976)の記載はヒメホタルイに一致し、刺針状花被片が2～5個でしばしば退化するとしており、コツブヒメホタルイ型に当たる可能性もある。Walker(1976)も上記1標本しか見出していないとしており、琉球では極稀であると考えられる。結論として植物誌の「琉球？」から「？」を削除したい。

植物誌438ページのヒメホタルイの項目の下から5行目で用いたコツブヒメホタルイの学名が間違っていた。以下のように訂正しお詫びする。「コツブヒメホタルイ form. *achaetus* (T.Koyama) T.Koyama」

14. ホタルイとカンガレイとの雑種について

植物誌脱稿後、神奈川県立生命の星・地球博物館収蔵標本を拝見し、この組み合わせの新たな標本を確認した。この標本も植物誌で取り上げた標本同様、箱根町仙石原産であった。一般的

に、カヤツリグサ科植物の推定雑種個体は果実が出来にくく大半が「しいな」となるが、この組み合わせの雑種は少なくとも外見上は発達する果実が出来やすい特徴があるようで、場合によっては大半の花に果実が出来ていて、これら仙石原産の2標本も同様であった。カヤツリグサ科植物の雑種個体は両親種の形態の間中となるが個体により形態にばらつきがあることが多い。仙石原産の2標本の形態を比較すると共通点が多く、外見は草丈50~70cm位、標本での茎の横幅は1mm強~1.5mm強で、やや大型のホタルイのような草姿であった。茎の横断面の形態は、円形のホタルイとは異なり基本的に3稜形でカンガレイに似るが、各辺は同一個体によっても変異があり、1辺はやや凹み気味で平滑、小穂群の出る1辺は辺上に不明な2稜があるか又は無くどちらの場合も中央がやや凹み標本では苞葉上(即ち花序より上の部分)ではこの凹みが少し割れて中の組織が見えることが多く、もう1辺は平坦で細い縦条線が多数あるか中央にやや明瞭だが高さの低い1稜が生じカンガレイと区別できる。上記の特徴のうち、苞葉上で小穂群の出る面の凹みが少し割れる特徴はホタルイやイヌホタルイの関係した雑種に、しばしば見られる特徴であるので覚えておくと同定の役に立つことがある。小穂は2~3個で大きさや外観がホタルイに似るが、先がカンガレイのように徐々に長く鋭く尖った卵形となる。瘦果横断面は3稜形で、先端の嘴が明瞭、刺針状花被片は6個、瘦果背面の稜付近に3個あり中央の花被片は瘦果の嘴と同高前後で両側の2個は嘴を含めた瘦果より明らかに長く、瘦果腹面中央に1個あり瘦果の嘴と同高前後、瘦果の両側の稜上に各1個あり嘴と同高前後。柱頭は3岐。

植物誌で引用したKPM-NA1105274の採集者名に不足があった。次のように訂正しお詫びする。「小崎昭則」→「小崎昭則・北川淑子」
証拠標本:箱根町仙石原 1989.9.9 勝山輝男 KPM-NA0118799.

15. イヌホタルイとカンガレイとの推定自然雑種を神奈川県植物相に追加

植物誌脱稿後、神奈川県立生命の星・地球博物館で標記組み合わせの標本を見出した。この標本には1999.8.6付けで「イヌホタルイ若しくはイヌホタルイ×カンガレイ、後日詳細検討の予定 小崎昭則」のメモが付してあり、小崎氏により

既にその可能性に触れられている。残念ながら本標本では地下部が無くバラバラになった茎のみの標本であるが、茎は少なくとも長さ90cmに達し、標本での最大幅は4mmに達し、上記のホタルイとカンガレイとの雑種に比べ植物体は大型であった。上記ホタルイとカンガレイとの推定自然雑種との形態の比較の意味の他、この組み合わせの雑種の形態は余り報告がないと思うので以下に記述しておく。基部の鞘状葉は個数が不明だが一番内側の最長のもので少なくとも長さ15cm程。茎の横断面の形状はホタルイとカンガレイとの雑種に概ね似ていて、明瞭な3稜があり基本的に三角形状な点でカンガレイ的である。茎横断面の各辺は、小穂群の出る1辺は低い明瞭な1稜或いは2稜があり、他の2辺は平坦だが細い縦条線が多数ある。なお、苞葉上の小穂群の出る面はホタルイとカンガレイとの雑種同様、中央の凹みが割れて中の組織が見えるものが観察された。小穂は4-6個付き長楕円形でやや胴長な円筒状で先端は急に尖る点がイヌホタルイ的で、長さ1.5cm、幅5mmに達する。小穂の鱗片は中心に細い中肋があり先端小さく突出した芒に終わり、中肋の両側はやや幅のある緑色で質やや厚くその周りは薄く茶色を帯びた膜質、鱗片の縁の中央より上には膜質で微細な鋸歯が密にある。この標本でもホタルイとカンガレイとの雑種同様、少なくとも外見上成熟した瘦果が良くでき、瘦果横断面は基本的に3稜形であるが腹面が低く緩やかな凸レンズ状となり、先端の嘴はやや明瞭で太く短い点がイヌホタルイ的である。刺針状花被片は6個、瘦果背面の稜付近に3個あり中央の花被片は瘦果の嘴と同高前後で両側の2個は嘴を含めた瘦果より明らかに長く、瘦果腹面中央に1個あり瘦果の嘴と同高前後、瘦果の両側の稜上に各1個あり嘴を含めた瘦果より明らかに長く背面の2個と同高かやや低い。雄しべは3個で葯長1.6mm前後。柱頭が3岐し長さはほぼ同長であるが、内2本はしばしば基部が短く合着しておりイヌホタルイの形質が混じっていることを伺わせる。

ホタルイとイヌホタルイとは同種の変異内とされる程、外見が似ているので、ホタルイとカンガレイとの雑種と、イヌホタルイとカンガレイとの雑種を1枚の標本だけで見分けるのは難しい。野外でカンガレイともホタルイ(もしくはイヌホタルイ)ともつかない茎の横断面が

いびつな個体を見出したら雑種の可能性があるので、周辺を見回して親の可能性のあるものを同時に採集し、標本にする際も強く押しつぶさずに茎の横断面が判るような標本を作るよう心がけるべきである。筆者も多数の標本を見たわけではなく、また雑種は個体により形態にばらつきがある可能性があるので、どの程度例外のない良い識別点となるかは断定出来ないが、小穂の形が片親であるホタルイ若しくはイヌホタルイに似ることが多く、両雑種を見分ける際の良い識別点のように思う。また、ホタルイの茎の横断面はほぼ円形(ただし茎表面には細い縦条線がある)で柱頭は常に3岐するのに対し、イヌホタルイの茎の横断面は不明な稜が5-6個あり柱頭は2岐又は3岐(3岐目は短くしばしば基部が他の1本と癒合している)るので、これらの形質が雑種にも反映される可能性があると思う。

横浜市瀬谷区で採集された草姿や茎の横断面の形態からイヌホタルイとカンガレイとの雑種と推定される標本があるが残念ながら花序が出る前であるので附記するにとどめる。

本組み合わせに該当する確実な雑種は県内初記録と思われ、植物誌で取り上げていないので以下の項目を438ページのホタルイ×カンガレイの次に追加する。

「3)イヌホタルイ×カンガレイ *Scirpus juncooides* × *triangulatus*

イヌホタルイとカンガレイとの雑種。川崎市多摩区で採集された標本がある他、本雑種と推定されるが花序のない若い個体が横浜市瀬谷区で採集されている。ホタルイとカンガレイとの雑種に比べ全草大型で、小穂の形態がイヌホタルイに似てやや胴長な円筒状長楕円形で先端は急に尖る。

標本:川崎市多摩区生田緑地 1987.8.2 川崎市青少年科学館 KPM-NA1101109;疑問品:横浜市瀬谷区矢指谷戸 1986.7.20 長谷川義人 KPM-NA1068629。」

16. タイワンヤマイとイヌホタルイとの推定自然雑種イヌタイワンヤマイモドキ(新称)を神奈川県植物相に追加

植物誌脱稿後、神奈川県立生命の星・地球博物館のイヌホタルイのジーナスカバーから横浜市内で採集された表記組み合わせの推定雑種を見出した。この組み合わせの雑種に和名が

見あたらないようなのでイヌタイワンヤマイモドキと新称する。タイワンヤマイに似ていて、将来ホタルイとタイワンヤマイの雑種が見出される可能性を考慮して始めにイヌホタルイのイヌをつけたものである。この組み合わせの雑種の形態の報告はないと思われるので以下に形態を記述する。外見上、小穂の形や1花序あたりの数の少なさ(当該標本では1~3個)や小穂の鱗片の先端が小凸に終わる点はタイワンヤマイに似るが、茎は多条でタイワンヤマイに見られるような明瞭な稜はなく長さ約28-41cm、標本での幅は1.0-1.3mm程度、タイワンヤマイの特徴である苞葉の長さはずっと短く1.0-3.5cm、小穂の鱗片全体の形はタイワンヤマイに比べ幅が広い。果実はしいなが混じるが外見上発達したものが見られ、瘦果の長さは2mm前後で上部にやや太い嘴があり、刺針状花被片は全て瘦果より短く5又は6個で、瘦果の両側の稜上に各1個あり瘦果の半分高、瘦果背面の稜付近に2若しくは3個あり両側2個は瘦果より高さがおおよそ嘴1個分低く中央の1個は嘴を含めた瘦果の1/4程度の高さで刺針状花被片が5個の時は退化し、瘦果腹面中央に1個あり嘴を含めた瘦果の高さの約1/3程度。柱頭は2岐または3岐で、3岐の場合中央のものはやや短い。雄しべは3個であるが、花糸が発達せず葯も開裂していないものが目立つ。片親にホタルイも考えたが、小穂の形、刺針状花被片がかなり短く、瘦果の嘴も短いのでイヌホタルイと考える。なお、神奈川県内ではタイワンヤマイは稀な植物で、横浜市内で採集された標本を見ていない。今後タイワンヤマイが本雑種採集地周辺で見いだされる可能性がある。

本組み合わせの雑種は県内初記録なので、植物誌438ページに以下の項目を前項イヌホタルイ×カンガレイの次に追加する。

「4)イヌタイワンヤマイモドキ *Scirpus wallichii* × *juncooides*

タイワンヤマイとイヌホタルイとの雑種。生じるのが非常に稀と思われる。横浜市戸塚区で採集された標本がある。タイワンヤマイは横浜市内で未確認種であるが、本雑種が見出されたことから今後発見される可能性がある。標本:横浜市戸塚区舞岡町 1992.11.3 高橋秀男 KPM-NA1107568。」

最後になりましたが、貴重なご指摘と数々の

標本を頂いた福岡県の筒井貞雄先生、文献を頂いた横浜市の北川淑子さんと神奈川県立生命の星・地球博物館の勝山輝男先生、標本の閲覧でお世話になった東京大学総合研究博物館、神奈川県立生命の星・地球博物館、横浜市こども植物園の関係者の皆様方にお礼申し上げます。

引用文献

- Ohwi, J., 1931. *Symbolae ad floram Asiae Orientalis* 2. Bot. Mag. Tokyo 45: 183-197.
- Nakai, T., 1933. *Notulae ad plantas Japoniae & Koreae* 43. Bot. Mag. Tokyo 47: 235-267.
- Kükenthal, G., 1935-1936. *Cyperaceae-Scirpoideae-Cypereae*. in Engl. (ed.), *Pflanzenr. Heft* 101, 671pp., Berlin.
- Schuyler, A.E., 1967-a. *Scirpus hattorianus*. North America. Not. Nat. (398): 1-5.
- , 1967-b. Leafy species of *Scirpus*. Proc. Acad. Nat. Sci. Phila. 119: 295-323.
- Walker, Egbert H., 1976. *Flora of Okinawa and the southern Ryukyu Islands*. 1159pp., Smithsonian Institution Press, Washinton, D.C..
- 佐藤千芳・今江正知, 1990. 阿蘇外輪山およびその周辺地域の湿生植物社会の植物相について. 熊本大学教養部紀要 自然科学編 25: 177-206.
- 初島濟彦, 1990. 琉球植物誌(追加・訂正). 1002pp., 沖縄生物教育研究会, 那覇市.
- 小崎昭則, 1992. 神奈川県産の植物補遺(2) 箱根に自生するハタベカンガレイ(第1報). FLORA KANAGAWA 32: 348.
- 清水建美・梅林正芳, 1995. 日本草本植物根茎図説, 262pp., 平凡社, 東京.
- 佐藤千芳・前田哲弥, 2001. ハタベカンガレイについて. 福岡の植物 16: 17-18.
- Kohno, K., Y. Jokawa & S. Daigobo, 2001. A new variety and a new combination of *Schoenoplectus mucronatus* (L.) Palla (Cyperaceae) from Japan. J. Jpn. Bot. 76: 227-230.
- 早坂英介, 2001. 日本産ウキヤガラ属とフトイ属の種名の正しい著者名. すげの会会報 9: 11-16.

バラ亜科への正誤及び補遺

(堀内洋)

脱稿後に以下の誤りに気付き、新知見を得たので報告する。コピーして植物誌の当該ページにはさんでいただけると幸いである。なお、植物誌出版後、Flora of Japan IIBが出版され、バラ亜科に関する多くの見解が発表された。以下でも極力その見解を取り上げるよう努めているが、同書で取り上げられたシノニム等の基準産地については今回調査を行っていない。それら

の学名に県内を基準産地とするものが含まれている可能性があるが、今後の調査を要することを予め断っておく。また、2002年2月1日発行の「神奈川県植物誌2001正誤表」に取り上げた事項のうち主要な誤りも本報告に含めた。

1. シモツケソウ属の命名者名

属名の命名者名が間違っていた。以下のように訂正する。

「5. シモツケソウ属 *Filipendula* Mill.」

2. シモツケソウの基準産地

Schanzer(1994)はシモツケソウ *Filipendula multijuga* Maxim.の選定基準標本に"Japonia, Jokohama, Hakone in cacumine montium lapidosorum graminosorum, 18-30.10.1862, Maximowicz (Lectotype: LE)."をあげている。これは箱根で採集された標本を指していると思われるので、シモツケソウの標題を以下のように変更する。

「(1a)シモツケソウ *Filipendula multijuga* Maxim. var. *multijuga* の選定基準標本は箱根産 (Maximowicz LE)」

3. アカバナシモツケソウについて

Schanzer(1994)は標本観察から、アカバナシモツケソウ *Filipendula multijuga* Maxim. var. *ciliata* Koidz.をシモツケソウ *F. multijuga* Maxim. var. *multijuga*のシノニムとし、瘦果の縁の毛はオニシモツケ *F. camtschatica* (Pall.) Maxim.との浸透交雑の結果ではないかと推定している。筆者も同様の印象を受けていたので大変興味深く思うが、遺伝学的な検証が必要であろう。

植物誌で示した西丹沢産の標本を含めアカバナシモツケソウがシモツケソウとオニシモツケとの浸透交雑の結果であると仮定した場合、西丹沢産の標本をどう説明できるかは興味深い問題を含んでいる。可能性がある考え方として、かつて西丹沢にオニシモツケが分布しており当時シモツケソウと交雑した個体の子孫が残存していた、現在でも西丹沢にオニシモツケが分布しておりシモツケソウとの交雑個体が偶然採集された、他から持ち込まれたアカバナシモツケソウの個体がたまたま採集された等が仮定される。神奈川県立生命の星・地球博物館には静岡県産とされるアカバナシモツケソウの標本がある。静岡県植物研究会編集(1967)や杉本(1984)によれば静岡県にアカバナシモツケソウの記録はないが、シモツケソウとオニシモツケ(または

ウスゲオニシモツケ)の記録があり、Schanzer(1994)の浸透交雑説を考えると興味深い。また、西丹沢産のアカバナシモツケソウがオニシモツケとの浸透交雑由来でないと仮定すれば、シモツケソウの変種としてのアカバナシモツケソウが西丹沢に産する、他から持ち込まれた変種アカバナシモツケソウがたまたま採集された、キョウガノコなど近辺で栽培されていた瘦果に縁毛のある同属植物との交雑起源の個体が採集されたなどの可能性が考えられる。以上のことは紙面の関係から植物誌では記述しなかったの、ここに付け加えておく。

ちなみにSchanzer(1994)の検討したアカバナシモツケソウの標本は牧野富太郎の東京都練馬区大泉のもので、これは牧野富太郎が何処かで採集してきたものを自宅で栽培していたものと考えられる。牧野(1948)はシモツケソウの瘦果は無毛もしくは多少縁毛があるとしアカバナシモツケソウを分類群として認めていない。アカバナシモツケソウ証拠標本:駿河 百間洞-大沢岳 1962.8.9(つぼみ~花) 大場達之 KPM-NA0024763。

4. ミヤマフユイチゴの分布域

Naruhashi(2001)によれば中国にも分布するという。

5. コバナフユイチゴの分布域

Naruhashi(2001)によれば中国、フィリピンにも分布するという。

6. ミヤマニガイイチゴの学名

Naruhashi(2001)に植物誌に用いた学名より、より早い優先権のある学名があげられているので、標題を以下のように変更する。

「(5)ミヤマニガイイチゴ *Rubus subcrataegifolius* (H.Lév. & Vaniot) H.Lév.; *R. koehneanus* Focke; *R. microphyllus* L.f. subsp. *koehneanus* (Focke) Sugim.; *R. microphyllus* L.f. var. *subcrataegifolius* (H.Lév. & Vaniot) Ohwi」

7. クマイイチゴのシノニムと分布域

Naruhashi(2001)やFrans et al.(1976)を見て、シノニムの種形容語及び出典の誤りに気付いた。標題を以下のように訂正する。

「(6)クマイイチゴ *Rubus crataegifolius* Bunge; *R. savatieri* L.H.Bailey, Stand. Cycl. Hort. (5): 3026(1916), nom. nov.の基準産地の1つは箱根(Savatier-343)」

また、Naruhashi(2001)によれば極東シベリアにも分布するという。

8. モミジイチゴの学名

Naruhashi(2001)はモミジイチゴとナガバモミジイチゴの他、地域的な変異に対して記載されたと思われる分類群をモミジイチゴ *Rubus palmatus* Thunb.一つにまとめている。筆者は全国の広義モミジイチゴ(上記のNaruhashi(2001)の見解を指す)について十分な知見を持っていないが、幾つかの標本館で見ると限りモミジイチゴとナガバモミジイチゴは区別できそうに思うので、今のところ植物誌で示した見解通り両変種を分けておきたい。

また、植物誌でヒメカジイチゴのシノニムの可能性があると引用した *R. tanakae* Kuntze をNaruhashi(2001)は広義モミジイチゴのシノニムとしている。

9. ヤエノモミジイチゴの産地

植物誌では丹沢犬越路を基準産地とするヤエノモミジイチゴ *Rubus palmatus* Thunb. var. *coptophyllus* (A.Gray) Kuntze form. *coronarius* H.Ohbaが今回の調査で確認できなかったとした。その後、1954年に横浜市保土ヶ谷区で採集された標本を見出した。Naruhashi(2001)は本品種の産地として本県の他、山形県をあげている。なお、Naruhashi(2001)は本品種の学名に "*Rubus palmatus* Thunb. form. *coronarius* H.Ohba" を用いているが、原記載は上記のように *R. palmatus* Thunb. var. *coptophyllus* (A.Gray) Kuntze の品種とされているので、正式には "*Rubus palmatus* Thunb. form. *coronarius* (H.Ohba)" と組み替えを行う必要がある。

証拠標本:横浜市保土ヶ谷区権太坂 1954.4.29(つぼみ~花) 出口長男 KPM-NA0079840, 0079847, 0079848 及び 0079850。

10. カジイチゴの分布域

Naruhashi(2001)によれば朝鮮、中国?にも分布するという。

11. ヒメバライチゴの学名と分布域

学名の命名者名が間違っていたので、標題を以下のように訂正する。

「(10)ヒメバライチゴ *Rubus minusculus* H.Lév. & Vaniot」

また、Naruhashi(2001)によれば中国にも分布するという。

12. サナギイチゴの学名と分布域

Naruhashi(2001)に従い学名を変更し、標題を以下のように変更する。

「(12)サナギイチゴ *Rubus pungens* Cambess.; *R. oldhamii* Miq.」

また, Naruhashi(2001)によれば台湾, 中国にも分布するという。

13. クロイチゴの分布域

Naruhashi(2001)によれば中国にも分布するという。

14. アオナワシロイチゴ (*Rubus parvifolius* L. form. *concolor* (Koidz.) Sugim.) を神奈川県植物相に追加

当該標本が神奈川県立生命の星・地球博物館に収蔵されていたにも関わらず標本を見出せず植物誌に載せることが出来なかった。当該標本では, 成葉の裏面が主脈や側脈上に毛がある他は無毛なため緑色に見えるが, 展葉中の若葉の裏面には一面に綿毛が生え白く見えた。

証拠標本: 横浜市港南区丸山台3丁目 1972.10.14 (花無し) 長谷川義人 KPM-NA120334.

15. セイヨウヤブイチゴの学名ほか

Naruhashi(2001)に従い, 標題を以下のように変更する。

「→(16)セイヨウヤブイチゴ *Rubus armeniacus* Focke; *R. fruticosus* auct. non L.」

それに伴い, 本文3行目~7行目の「本県で採集されたものは~上記和名と学名にあてた。」及び本文最後の3行の「また, 近年, 園芸店では~帰化の記録がある。」を, それぞれ以下のように変更する。

「本県で採集されたものは「久内帰化, 長田帰化76」のセイヨウヤブイチゴ(学名は *R. fruticosus* を用いている)の記載に合致する。欧米ではセイヨウヤブイチゴと400以上ある栽培品種を総称してブラックベリーと呼ぶという。日本に入っているのは栽培品種の可能性もあるが詳しい判断がつかない。」

「日本では本州, 四国, 九州に, 海外では南北アメリカ大陸, オーストラリア, ニュージーランドに逸出或いは帰化している。また, 近年, 園芸店では種々のキイチゴ亜属植物が販売されており, 今後これらも逸出する可能性がある。」

16. カジイチゴとクサイチゴの雑種について

植物誌ではニシムライチゴ *Rubus nishimuranus* Koidz., ハチジョウクサイチゴ・シマミツバキイチゴ *R. hachijoensis* Nakai, トヨラクサイチゴ・オニクサイチゴ *R. toyorensis* Koidz. を区別せずにカジイチゴとクサイチゴの推定雑種としてまと

め, 県内産の標本の形態を比較しニシムライチゴとトヨラクサイチゴの両方の型に当たるものが見られるとした。Naruhashi(2001)はニシムライチゴ(=ハチジョウクサイチゴ)を $2n=28$ の複二倍体の雑種起源の独立種で伊豆諸島と小笠原諸島に分布し, トヨラクサイチゴを $2n=14$ のF1雑種で本州, 四国, 九州に分布するとして両者を区別しているが, 両者の形態的な相違点を示していない。Naruhashi(1976)はカジイチゴ, クサイチゴ, トヨラクサイチゴ, ニシムライチゴ(原文ではハチジョウクサイチゴの和名を用いている)の形態を比較し, トヨラクサイチゴの複葉の頂小葉には柄があるのに対しニシムライチゴの頂小葉には殆ど柄がないとしている。県内産の標本を検討すると, 例えば同じ真鶴町で採集されていても頂小葉の柄が明瞭な標本(トヨラクサイチゴ型)と殆どない標本(ニシムライチゴ型)とがあるが, それ以外に明瞭な違いが認識できず, 情報の限られる標本からは区別が難しいように思われた。Naruhashi(2001)の見解に従いニシムライチゴとトヨラクサイチゴを分かつべきか否かは現在の筆者には判断が付かないが, 県内産のカジイチゴとクサイチゴの雑種起源の個体群の実体については更なる研究が必要と思われる。

また, 植物誌のクサイチゴの項でカジイチゴとクサイチゴの雑種の可能性があるとして触れた真鶴半島を基準産地とするトゲナシクサイチゴ *R. hirsutus* Thunb. var. *inermis* Koidz. を Naruhashi(2001)はトヨラクサイチゴのシノニムとしている。カジイチゴとクサイチゴの推定雑種が真鶴半島で採集されているので, トゲナシクサイチゴが両種の推定雑種である可能性があるが, 筆者は基準標本を未見であるので判断が付かない。ちなみに, 杉本(1972)はトゲナシクサイチゴをニシムライチゴの品種とする見解(*R. nishimuranus* Koidz. form. *inermis* (Koidz.) Sugim.)を提案している。

なお, Naruhashi(2001)は *R. nishimuranus* に対しニシムラキイチゴ(西村木苺)の和名を用いている。*R. nishimuranus* に最初に和名を新称したのは牧野・根本(1925)でニシムライチゴ(西村苺)であるので, ここでは植物誌同様ニシムライチゴ(西村苺)の和名を用いておく。

証拠標本: ニシムライチゴ型 足柄下郡真鶴町 1983.9.18 採集者不明 KPM-NA1046101; トヨラ

クサイチゴ型 足柄下郡真鶴町真鶴岬海岸
1999.11.8 勝山輝男 KPM-NA0117154.

17. アイノコヘビイチゴを神奈川県内で確認

アイノコヘビイチゴ *Duchesnea* × *hara-kurosawae* Naruh. & M.Sugim. はヘビイチゴとヤブヘビイチゴとの推定雑種で、県内では Hara & Kurosawa (1959) に津久井町峯の薬師下の記録があるが、県内の標本庫で確実な標本を見いだせなかったため、植物誌では参考として取り上げ、再発見される可能性が高いと記した。その後、東京大学総合研究博物館で Hara & Kurosawa (1959) に引用された標本を確認した。標本には「東大 Cult. (相州梅ノ木平カラ峯ノ薬師上り口) May 21. 1959 Hiroshi Hara」, 「2n=49 (tested by S.Kurowawa)」等と書かれていた。植物誌では Hara & Kurosawa (1959) の「峯の薬師下」を額面通り津久井町としたが、ラベルにある梅ノ木平は東京都八王子市南浅川町に、峯ノ薬師は神奈川県津久井郡津久井町三井に、それぞれ属し、両地名を結ぶ道は都県境を交差しているの、この標本が神奈川県内で確実に採集されたかどうか不確実なことが判った。なお、この標本には1枚の台紙に2点の標本が貼られており、いずれも一見小型のヤブヘビイチゴに似た印象を受けた。左の標本に1個、右の標本に2個の計3個の花柄或いは果柄があるが、花卉がなく萼片や副萼片に覆われており、偽果の発達状況を確認できなかった。触った感触では、偽果が発達しつつあるような膨らみは感じられなかった。

ところが、植物誌脱稿後の2001年6月23日、相模原市博物館の秋山幸也氏のご案内で相模原市上鶴間の境川右岸沿いを調査したおりに本推定雑種が生育しているのを見出した。境川と平行する未舗装の歩道沿いの山側林縁部に数mにわたり細い帯状に生育していた。観察した個体群は全てアイノコヘビイチゴで、両親(ヘビイチゴとヤブヘビイチゴ)は周辺に見いだせなかった。両親の個体群が消滅した後も栄養繁殖により個体群を維持しているものと思われる。アイノコヘビイチゴは偽果も瘦果もできないとされる。今回見出した個体群でも発達した偽果が全く見られず、偽果が全く膨らまずに枯れていた。偽果が発達しないまま果柄が枯死していた。結実期であるのに赤い偽果が見つからないヘビイチゴ属の個体を見つけたら注意してみると案外見出すことが出来るのかも知れない。また、神奈川

県立生命の星・地球博物館と横浜こども植物園でヘビイチゴ属の標本を再検討したところ以下に示す7点の標本が見出された。杉本ほか(1991)によればアイノコヘビイチゴの形態は両種の間よりヤブヘビイチゴに近いとされているが、今回確認したアイノコヘビイチゴは外見がヘビイチゴに似た印象のもの6点、ヤブヘビイチゴに似た印象のもの(標本番号の右肩に*をつけたもの)2点があった。実際、見出したアイノコヘビイチゴの標本は、その印象の似ていた親の何れかに同定されていた。外見上、偽果の有無以外に両親との区別は不可能であった。

ヘビイチゴとヤブヘビイチゴとの識別点は色々あるが、植物誌の本文でも触れたように、ある程度熟した偽果があれば偽果表面(瘦果ではない)の細毛の有無が両種の同定の決め手になる。ヘビイチゴ属植物を採集される際は、ある程度熟した偽果がある植物(アイノコヘビイチゴは偽果が出来ないので偽果が出来ると思われる時期の植物)を採集されることをおすすめする。その他、開花期であれば花卉の形態も有効な手がかりとなる。詳しくは植物誌の花の図をご覧頂きたいが、典型品ではヘビイチゴはハート型、ヤブヘビイチゴは先端がややくぼんだ狭倒卵形である。今回、相模原市で見出した個体群では1個の花を見出したが、その花は両者の中間型であった。同様の花卉をつけていても偽果が発達した標本もあるので決定的な区別点では無いようだが、この花卉の形はある程度参考になるので覚えておいて良い。この3者の花卉の形質はNaruhashi & Sugimoto (1986) や杉本ほか(1991)にも図が載っている。植物誌で積み残したヤマヘビイチゴの実体は未だ不明であり今後も検討してゆきたいが、現時点では取りあえず上記の様な点に留意して標本の採集や同定に努めるのが無難であると考える。

証拠標本: 相模原市上鶴間境川右岸沿い 2001.6.23 (しいな) 堀内洋 堀内8634; 相模原市鶴ノ森境川沿い 1982.6.3 (しいな) 高橋秀男 KPM-NA1044004 (地図上で地名を比べると堀内が今回野外で見出した場所の1km程上流の地域にあたる); 横浜市栄区公田町 1997.4.29 (花~しいな) 野津信子・山崎泰子 YCB425414, 横浜市栄区田谷 1959.4.3 (つぼみ~しいな) 宮代周輔? YCB023069; 横浜市西区久保町 1996.5.1 (つぼみ~しいな) 吉川勝美 KPM-NA0101840の5標本の

うち3標本;津久井郡藤野町牧場 1984.6.17 (しいな) 高橋秀男 KPM-NA1044103*;足柄上郡開成町吉田島 1986.5.23 (しいな) 浜中義治 KPM-NA1044138;愛甲郡清川村中里 1986.4.6 (花~しいな) 高橋秀男 KPM-NA1044166*.

18. オヘビイチゴの学名と分布域

Naruhashi(2001)に植物誌に用いた学名より、より早い優先権のある学名があげられているので、オヘビイチゴの標題を以下のように変更する。

「(3)オヘビイチゴ *Potentilla anemonifolia* Lehm.; *P. sundaica* (Blume) Kuntze var. *robusta* (Franch. & Sav.) Kitag.」

また、Naruhashi(2001)の見解に従えばインドシナ半島、インドネシア、インドにも分布することとなる。

19. イワキンバイの分布域

Naruhashi(2001)によれば朝鮮、中国にも分布するという。

20. ツルキンバイの学名と分布域

池田(2001)に植物誌に用いた学名より、より早い優先権のある学名があげられているので、ツルキンバイの標題を以下のように変更する。「(5)ツルキンバイ *Potentilla rosulifera* H.Lév.; *P. yokusaiana* Makino in Bot. Mag. Tokyo 24: 142 (1910)の原記載に引用された標本の1つは相模国大山(松田定久 1999.5.15)」

なお、*P. rosulifera*は1909年に記載され基準産地は朝鮮半島とされる(池田, 2001)。また、池田(2001)は1908年に記載された*P. freyniana* Bomm. var. *grandiflora* Th. Wolfもツルキンバイの異名とし基準産地の一つに“Oyama”をあげているが、この産地は*P. yokusaiana*同様に相模国大山である可能性もある。

また、Naruhashi(2001)によれば九州;朝鮮、中国にも分布するという。

21. キジムシロの八重咲き品について

Naruhashi(2001)はヤエミヤマキジムシロ *Potentilla fragarioides* L. var. *paucifoliolata* Sugim. form. *pleniflora* Sugim. をキジムシロの八重咲き品種として組み替えヤエキジムシロ *P. sprengeliana* Lehm. form. *pleniflora* (Sugim.) Naruh. とした。ヤエミヤマキジムシロの原記載は筆者も植物誌執筆時に読んでいたが、これは富士山の高山低木帯に産する小葉が少なく側小葉が1~2対ものに対し記載され、富士山の他、南アルプスにも産する

とされる(静岡県植物研究会編集, 1967;杉本, 1984)。執筆時に神奈川県立生命の星・地球博物館収蔵の南アルプス産のキジムシロ類標本があり比較したところ、地上匍枝があるもの(=広義ツルキジムシロ?)と匍枝が無いものがあるが匍枝の有無以外に区別が付かない点などで、県内低地にふつうに見られるキジムシロとは全く同じ分類群とは思えなかった。従って、植物誌ではヤエミヤマキジムシロとは別のものとして秦野市産のキジムシロの八重咲き標本に対しヤエザキキジムシロと新称した。ミヤマキジムシロやヤエミヤマキジムシロの基準標本を見ていないのでハッキリしないが、Naruhashi(2001)のヤエキジムシロと堀内が植物誌で報告したヤエザキキジムシロとは同じものを指していない可能性がある。今後の検討課題である。

22. 神奈川県産ツルキジムシロ(広義)の学名とヒメツルキジムシロとの関係

植物誌ではツルキジムシロ(広義)が県内では箱根に見られ、形態的には四国産の標本を元に記載されたヒメツルキジムシロと良く似ているが生育環境が異なることから比較が必要であると書いた。Naruhashi(2001)はヒメツルキジムシロをテリハキンバイとツルキジムシロ?との推定雑種 *Potentilla × yamanakae* (Naruh.) Naruh. とした。県内にはテリハキンバイは生育しておらずヒメツルキジムシロが生じる可能性はなく、植物誌で書いたように別の植物群であることは間違いないと思う。また、南谷(2000)は宮崎県中部からヒメツルキジムシロを報告しているが、その生育地は溪谷の岩上(標高10m)や堤防の草地(標高100m)とされており、矢張り神奈川県産のツルキジムシロ(広義)とは生育環境が異なっている。

Naruhashi(2001)はツルキジムシロ *P. fragarioides* L. が遺存的で各地に点在・孤立していて形態的に多型で北海道、本州、四国、九州;極東ロシア、朝鮮、中国?に分布するとして、植物誌で堀内が示したのと同様に広い意味でツルキジムシロを捉えている。また、植物誌で用いた *P. stolonifera* より *P. fragarioides* の方がより早い優先権のある学名であることがわかったので、植物誌のツルキジムシロ(広義)の標題を以下のように変更する。

「(8)ツルキジムシロ(広義) *Potentilla fragarioides* L.; *P. stolonifera* Lehm. ex Ledeb.」

23. ミツモソウの分布域

Naruhashi(2001)によれば四国に自生はないとされる。

24. Franchet & Savatierの命名したカワラサイコの幾つの変種と分布域

ホソバカワラサイコ *Potentilla chinensis* Ser. var. *lineariloba* Franch. & Sav. 等、幾つの変種が Franchet & Savatier の Enum. Pl. Jap. 2(2): 338-339 (1878) に記載されている。植物誌ではホソバカワラサイコは変異が連続して分けられず、他の変種は十分検討が出来なかったため実体が良く判らないと書いた。その後、中井(1935)が基準標本を調査し、ホソバカワラサイコはカワラサイコの押し方が足らず葉が巻いた標本であるなど、これら変種は全てカワラサイコであると報告していることを知った。なお、Naruhashi(2001)は、*isomera* をヒロハノカワラサイコのシノニムとしているが、ここでは実際に基準標本を確認したという中井(1935)の見解に従ってカワラサイコのシノニムとしておく。以上のようなことから、植物誌のカワラサイコの解説の第2段落「葉裂片が狭線形で～」を削除し、これらが県内を基準産地とするので植物誌のカワラサイコの標題を次のように変更する。「(12)カワラサイコ *Potentilla chinensis* Ser.; *P. chinensis* Ser. α . *micrantha* Franch. & Sav., Enum. Pl. Jap. 2(2): 338 (1878)の基準産地は箱根山と横須賀周辺; *P. chinensis* Ser. β . *hirtella* Franch. & Sav., Enum. Pl. Jap. 2(2): 338 (1878)の基準産地は小田原周辺と横須賀; *P. chinensis* Ser. γ . *concolor* Franch. & Sav., Enum. Pl. Jap. 2(2): 338 (1878)の基準産地は横須賀; *P. chinensis* Ser. δ . *lineariloba* Franch. & Sav., Enum. Pl. Jap. 2(2): 339 (1878)の基準産地は横須賀周辺; *P. chinensis* Ser. ϵ . *ramosa* Franch. & Sav., Enum. Pl. Jap. 2(2): 339 (1878)の基準産地は横須賀周辺; *P. chinensis* Ser. ζ . *isomera* Franch. & Sav., Enum. Pl. Jap. 2(2): 339 (1878)の基準産地は横須賀周辺」

なお、Franchet & Savatier (1878)は、これら変種で基準産地が横須賀周辺の場合は稀と記しているが、カワラサイコが横須賀周辺に自生しえたかどうかは生育環境を考えると少し疑問である。

また、Naruhashi(2001)によれば台湾にも分布するという。(附記)本稿を書き終えた後、植物誌1519ページに小崎昭則氏が神奈川県を基準産地とする学

名のカワラサイコの項で上記 Franchet & Savatier (1878)の記載した変種がカワラサイコであることを既に指摘していることを知ったが、その参照文献を"cf. Kitag. in J.Jpn.Bot., 11 (10): 736"及び"cf. Kitag. in J.Jpn.Bot., 11 (10): 736-737"としている。これは上記の中井(1935)であるので"cf. Nakai in J.Jpn.Bot., 11 (10): 736"及び"cf. Nakai in J.Jpn.Bot., 11 (10): 736-737"と訂正すべきである。

25. ヒロハノカワラサイコの学名と分布域

Naruhashi(2001)によればヒロハノカワラサイコの学名に従来 *Potentilla nipponica* Th. Wolf が用いられてきたが、原記載では種形容語の中の p は一つで *Potentilla nipponica* Th. Wolf であるという。従って標題を以下のように変更する。

「(13)ヒロハノカワラサイコ *Potentilla nipponica* Th. Wolf」

また、Naruhashi(2001)によれば台湾、朝鮮、中国?にも分布するという。

26. オキジムシロの分布域

Naruhashi(2001)によればヨーロッパからアジアまで広く分布するという。

27. コバナキジムシロの分布域

Naruhashi(2001)によれば北西ロシア、朝鮮にも分布するという。

28. ダイコンソウ (*Geum japonicum* Thunb. var. *japonicum*) の分布域

Ikeda(2001)によれば朝鮮にも分布するという。

29. コダイコンソウの分布域と分類学的な位置付けについて

植物誌では文献を元にコダイコンソウ *Geum japonicum* Thunb. var. *yoanum* (Koidz.) Murata の確実な分布東限を神奈川県と記述した。その後、千葉県立中央博物館でダイコンソウのジーナスカバーを調査した折りに千葉県産のコダイコンソウの標本を見出した。天野ほか(1995)などに千葉県のコダイコンソウの記録はなく、本報告により千葉県にコダイコンソウが分布すること、従って分布東限が千葉県まで拡大したことが明らかになったと考える。

Ikeda(2001)はコダイコンソウを狭義ダイコンソウの品種へ組み替えた (*G. japonicum* Thunb. form. *yoanum* (Koidz.) H. Ikeda)。コダイコンソウでも狭義ダイコンソウ型の根生葉が混じる標本もあり区別が難しくなることがあるが、植物誌で述べたように狭義ダイコンソウとコダイコンソウは県内でも分布傾向が異なるほか日

本国内でも分布が異なり、県内産の標本では狭義ダイコンソウに比べ全草小さい傾向があり開花期も異なるようなので、やはり変種としておく方がよいと思う。

証拠標本:千葉県鴨川市元清澄山下 1984.9.22 (熟した果実) 藤平量郎 CBM76626.

30. キンミズヒキの学名について

植物誌では日本産のキンミズヒキを *Agrimonia pilosa* Ledeb. var. *japonica* (Miq.) Nakai とし、基変種 var. *pilosa* と区別した。Naruhashi(2001) は形態的に多型であるとして東ヨーロッパ～中国、朝鮮、台湾、日本の亜熱帯～冷温帯のものを基亜種 var. *pilosa* としてまとめている。現時点では筆者には判断がつかないので、とりあえず植物誌の内容を変更しないでおく。

31. ヒメキンミズヒキの分布域

Naruhashi(2001)によれば中国にも分布するとされる。

32. ワレモコウの分布域

Naruhashi(2001)によれば台湾、北米大陸にも分布するとされる。

33. ワレモコウ及びウラゲワレモコウの有毛品について

植物誌ではワレモコウ及びウラゲワレモコウは従来の文献では全草無毛(ただしウラゲワレモコウは小葉および苞葉の裏面を除く)とされているが県内産の標本では全草無毛個体の他に、白毛、明るい茶褐色の毛、腺質の多細胞の毛が生えている個体が多数あることを指摘し今後の研究課題であるとした。植物誌出版後、同様の見解が既に大橋・山中(1994)により発表されていることを知った。ただし、大橋・山中(1994)は日本産の全てのワレモコウは若い時期に茎や葉に縮れた白色長軟毛があるように書いているが、筆者は県内産の野外個体及び標本の中には春の開芽当初から全草無毛と思われる個体を観察しており、その点は見解が異なる。なお、Naruhashi(2001)はワレモコウは無毛で、時に若い時期に白色軟毛や長軟毛があるとしているが、ウラゲワレモコウを区別していない。

34. トゲナシノイバラの標本を追加

次の標本を追加する。

横浜市中区山手町外人墓地 1999.6.10(未熟な果実) 田中京子 YCB419725; 横浜市戸塚区東俣野 1987.5.26(花無し) 斎藤溢子 KPM-NA1045713.

35. フジイバラの分布域

Ohba(2001)によれば四国には分布しないとされる。

36. テリハノイバラの分布域

Ohba(2001)によれば、*Rosa wichuraiana* Crép. は Bull. Soc. Roy. Bot. Belgique 25: 189 (1886) で有効に発表されているので標題の異名を次のように変更する。

「*R. wichuraiana* Crép.」

Ohba(2001)によれば台湾、中国、フィリピン(ルソン島)にも分布するという。

37. ノアズマイバラについて

植物誌ではノイバラとアズマイバラの推定雑種に対しノアズマイバラの和名を新称し、「大井誌92」ではオオサクラバラ *Rosa pulcherrima* Koidz. を本推定自然雑種にあてていることを指摘した。Ohba(2001)もこの組み合わせの雑種に対しオオサクラバラ *R. × pulcherrima* Koidz. を用いている。東京大学総合研究博物館でオオサクラバラの基準標本を調査したところ、小葉の両面とも無毛であるなど筆者が県内の標本館で見出した両種の推定雑種とした標本とは大きく異なるもので両種の推定雑種とは思われなかった。筆者はバラ属を専門に見ているわけではないが、オオサクラバラをノイバラとアズマイバラとの推定雑種とする見解には疑問が残る。従って、植物誌の標題通り両種の推定雑種に対しノアズマイバラ *Rosa multiflora* Thunb. × *R. onoei* Makino var. *oligantha* (Franch. & Sav.) H. Ohba を用い、オオサクラバラ *R. × pulcherrima* Koidz. を採用しないでおきたい。

植物誌844ページのノアズマイバラの標本 KPM-NA1045519 の採集者名が間違っていた(村上四郎→村上司郎)。ここに訂正しお詫び申し上げる。また、最後の秦野市産の証拠標本の標本番号が抜けている。その標本の標本番号は KPM-NA1045521 である。

次の標本を追加する。

横浜市青葉区寺家 1982.5.19(つぼみ～花) 勝山輝男 KPM-NA1045647.

38. テリハアズマイバラの標本を追加

テリハアズマイバラはテリハノイバラとアズマイバラの雑種で杉本順一により和名が新称された(静岡県植物研究会編集, 1967)。植物誌では都筑区産の標本を取り上げたが、その後、以下にあげるような本雑種と思われる新たな標本を数点見出した。これら標本では葉の券図

気はややテリハノイバラに似ていたが、小葉が5枚程度と少なく、小葉の裏面が白みを帯び、頂小葉の先端がやや尾状に伸びることはアズマイバラに似ていた。葉縁の鋸歯や托葉の形質は両種の間中であつた。数点の標本を見ただけであるが托葉の形質が良い判断基準のように思えた。すなわち、テリハノイバラの托葉は葉軸との癒合部分の幅が広く上部の非癒合部が幅の広い三角形状であるのに対し、アズマイバラでは癒合部の幅が極狭く非癒合部が細長い被針形状になる。冬芽が開芽して始めに出る数葉などの例外を除き、県内産の標本では托葉の形質は安定しているように思える。雑種と思われる個体では托葉の形態は両種の間中となる。証拠標本：横浜市旭区上白根町 1981.6.6(つぼみ～花) 内田光雄 KPM-NA1045681; 横浜市戸塚区田谷 1960.6.12(花～しいな或いは未熟な果実) 宮代周輔 YCB023599及びYCB023600; 鎌倉市二階堂天園 1987.4.25(花無し) 浜中義治 KPM-NA1045857。

39. コハマナスの和名と学名について

Ohba(2001)は「コハマナシ *Rosa × iwara* Siebold ex Regel」としている。和名はMakino(1905)に従い植物誌通りコハマナスを用いるが、学名の命名者名を変更し、植物誌のコハマナスの標題を以下のように変更する。

「3)コハマナス *Rosa × iwara* Siebold ex Regel; *R. yezoensis* Makino」

40. ミシマイバラを神奈川県植物相に追加する

植物誌出版後、神奈川県立生命の星・地球博物館収蔵標本からテリハノイバラとのイバラの推定自然雑種を見出した。ミシマイバラ *Rosa misimensis* NakaiはNakai(1939)により奇形品もしくは雑種と疑われながらも新種として記載され、Ohba(2001)はテリハノイバラとノイバラの推定雑種としている。東京大学総合研究博物館でミシマイバラの基準標本を調査し、テリハノイバラとノイバラの推定雑種であることを確認した。ミシマイバラは県内新産となるので、次の項目を植物誌のコハマナスの後に追加する。

「4)ミシマイバラ *Rosa × misimensis* Nakai

テリハノイバラとノイバラとの推定雑種。植物誌出版後、採集済みの標本から見出された。テリハノイバラとノイバラの開花期は重複することが稀なので、本雑種が生じる機会は少ないものと考えられる。

標本：横浜市青葉区元石川 1982.5.19(つぼみ～花) 勝山輝男 KPM-NA1045669。」

41. ドウリョウイバラを神奈川県植物相に追加する

植物誌出版後にOhba(2001)により記載されたノイバラとモリイバラとの雑種 *Doryō-ibara Rosa × pulcherrima* Koidz. nothovar. *kanaii* H. Ohbaは「Minamiashigara-gun, Hakone-machi, Saijyo-ji」が基準産地とされている。東京大学総合研究博物館で基準標本を確認したところ、「相模箱根南足柄町最乗寺 500m May 23 1958 金井弘夫」, 「道イバラ(仮称)」等と書かれていた。従って、和名は「ドウリョウイバラ」と発音し、「Saijyo-ji」はドウリョウイノデでも有名な箱根外輪山の中腹にある南足柄市大雄山最乗寺(別名、導了尊=どうりょうそん)である。学名については上記のノアズマイバラで述べたように *R. × pulcherrima* Koidz. がノイバラとアズマイバラの雑種に相当するか疑問があるが、仮の措置としてOhba(2001)の学名を採用しておく。植物誌に前項のミシマイバラの後に次の項目を追加する。

「5)ドウリョウイバラ *Rosa × pulcherrima* Koidz. nothovar. *kanaii* H. Ohba, Flora of Japan IIb 177 (2001)の基準標本は南足柄市大雄山最乗寺

植物誌出版後発表されたノイバラとモリイバラとの雑種。県内を基準産地とする。なおオオサクラバラ *R. pulcherrima* Koidz. はノイバラとアズマイバラとの雑種でない可能性が高く標題の学名は再考が必要と考える。

標本(基準標本): 南足柄市大雄山最乗寺 1958.5.23 金井弘夫 TI。」

最後になりましたが、文献をご教示頂いた福島大学黒沢高秀氏、アイノコヘビイチゴ発見の機会を与えて下さった相模原市立博物館の秋山幸也氏、最乗寺に関する情報をお教えいただいた神奈川県立生命の星・地球博物館勝山輝男氏、標本の閲覧でお世話になった東京大学総合研究博物館、神奈川県立生命の星・地球博物館、横浜市こども植物園、千葉県立中央博物館の関係者の方々にお礼申し上げます。

引用文献

- Makino, T., 1905. Observations on the Flora of Japan. Bot. Mag. Tokyo 19: 131-156.
牧野富太郎・根本莞爾, 1925. 日本植物総覧, 1942pp., 春陽堂, 東京.
中井猛之進, 1935. *Potentilla chinensis* Seringe var.

- isomera* Franch. & Sav.ハひろはのかはらさいこデ
ハナイ. 植物研究雑誌 11: 736-737.
- Nakai, T., 1939. *Notulae ad Plantas Asiae Orientalis* (IX). *J. Jpn. Bot.* 15: 1-19.
- 牧野富太郎, 1948. 牧野日本植物図鑑, 1070pp., 北隆館, 東京.
- Hara, H. & S. Kurosawa, 1959. On the *Duchesnea indica* group. *J. Jpn. Bot.* 34: 161-166.
- 静岡県植物研究会編集, 1967. 静岡県植物誌. 585pp., 静岡大学教育学部, 静岡県.
- 杉本順一, 1972. 新日本樹木総検索誌. 583pp., 井上書店, 東京.
- Frans A. Stafleu & Richard S. Cowan, 1976. *Taxonomic Literature I* (2nd ed.), 1136pp., Bohn, Scheltema & Holkema, Utrecht.
- Naruhashi, N., 1976. Taxonomical note on the hybrid between *Rubus trifidus* and *R. hirsutus* (1) Morphology. *J. Geobot.* 24: 26-34.
- 杉本順一, 1984. 静岡県植物誌. 814pp., 第一法規出版株式会社, 東京.
- Naruhashi, N. & M. Sugimoto, 1986. A natural hybrid species of *Duchesnea* (Rosaceae). *J. Phytogeogr. & Taxon.* 34: 11-14.
- Sugimoto, M., H. Ishizu & N. Naruhashi, 1991. Morphological study of *Duchesnea* (Rosaceae). *J. Phytogeogr. & Taxon.* 39: 87-95.
- Schanzer, Ivan A., 1994. Taxonomic revision of the genus *Filipendula* Mill. (Rosaceae). *J. Jpn. Bot.* 69: 290-319.
- 大橋広好・山中二男, 1994. ワレモコウは無毛か. 植物研究雑誌 69: 320-323.
- 天野誠・遠藤泰彦・御巫由紀・大場達之, 1995. 千葉県産維管束植物チェックリスト. 千葉中央博自然誌研究報告 特別号 2: 11-74.
- 南谷忠志, 2000. 九州の植物新発見. 植物地理・分類研究 48: 121-131.
- 池田博, 2001. ツルキンバイの学名. 植物研究雑誌 76: 237-238.
- Ohba, H., 2001. *Rosa* L. in *Flora of Japan* IIb, 169-177.
- Ikeda, H., 2001. *Geum* L. in *Flora of Japan* IIb, 209-211.
- Naruhashi, N., 2001. *Rubus* L., *Agrimonia* L., *Sanguisorba* L., *Duchesnea* Sm. and *Potentilla* L. in *Flora of Japan* IIb, 145-169, 178-185, 191-206.

植物誌2001刊行後のセリ科の訂正および追加

(河濟英子)

1. 属への検索表—II(結実期の花序による)の一部訂正

『神奈川県植物誌2001』p.1062下から11行目以

下を次のように訂正します. 誤って22. セリモドキ属を「萼歯不明」にまとめてしまいました. が, p.1078-9の記述と図のように, 萼歯は宿存し結実期にも明瞭です.

2. イブキボウフウ属イブキボウフウの分布地の追加

『神奈川県植物誌2001』p.1080~1081イブキボウフウの分布に「大磯, 駒ヶ岳, 丹沢山も挙がるが, 標本は未確認。」と記したが, 国立科学博物館(TNS), 東京大学総合研究博物館(TI)の標本を閲覧する機会に恵まれ, 現在の分布図にドットされていない地点での採集品を確認したので, 記録しておく. 新たに確かめられた産地『箱根』の標本は幅広で丸みのある裂片をもつ, やや海岸型に近い葉形の個体であった. ◎印は植物誌01のそのメッシュに記録のない産地.

- ◎相模浦賀 1889.7.18 Y.Yabe (未熟な実)
- ◎相模葉山 1910 久内清孝 (花)
- ◎足柄下郡箱根町 1922 M.Kitagawa (葉)
- ・三浦初声 1923.8 T.Makino (花)
- ・相模鎌倉 1933.5 Y.Momiyama (葉)
- ・三崎 1939.7.30 M.Honda (花)
- ・三崎 1939.7.30 ? (花)
- ◎葉山長者ヶ崎 1941.9.13 藤田路一 (熟した実)
- ・相模丹沢焼山 1942.10.6 山崎敬 (熟した実)
- ・相模大船 1946.7.13 S.Teramoto (花)
- ◎藤沢六会村 1952.8.5 Y.Asai (花)
- ・三浦劔崎 1965.7.28 S.Kobayashi (花)
- 以上TI収蔵の標本.
- ・相模松輪 1907.7.20 ? (花)
- ・三崎小網代 1900.8.2 二階堂重数 (花)
- 以上TNS収蔵の標本.

3. チドメグサ属帰化種について

『神奈川県植物誌2001』p.1064に記載したウチワゼニクサは, 大滝末男氏が千葉県長生郡長生村入山津の溝, 水田畦に逸出したものを報告したのが国内初めての帰化種で(1972 野草 330:73~74), その後, その周辺に定着したのか絶えたのか以後報告はないが, 千葉県佐原市の標本(1990.7 佐藤新司 TNS539441)がウチワゼニクサとして収められている.

ところが, 小崎昭則氏は江東区有明で採集したチドメグサ属の植物について, ウチワゼニクサ *Hydrocotyle verticillata* Thunb.か, 或いは, よく似た帰化種タテバチドメグサ *Hydrocotyle vulgaris* L. (村田源 1988 植物分類, 地理39(4-

●セリ科の属への検索表(変更部分のみ)

K. 萼歯は果時にも宿存し, 明瞭

L. 大散形花序の柄は有毛 22. セリモドキ属

L. 大散形花序の柄は無毛

M. 大散形花序の柄は不同長, 3~8cm. 果実は側面から扁平な卵円形. 花柱は左右に反曲する 18. ドクゼリ属

M. 大散形花序の柄は同長, 3cm以下. 果実は円柱状の楕円形. 花柱は直立あるいは斜上する 24. セリ属

K. 萼歯はないか, 微小で不明

L. 小総苞片は卵形~狭楕円形

M. 小総苞片は無毛 16. ミシマサイコ属

M. 小総苞片の縁に繊毛がある

N. 小花柄の上端(果実の基部)に短毛が輪生する 4. シャク属

N. 小花柄の上端(果実の基部)は無毛 5. カエロフィルム属

L. 小総苞片は線形~線状披針形

M. 果実の長さは5~7mm. 大散形花序の柄には微細なざらつきがある 32. ヤマゼリ属

M. 果実の長さは2~3.5mm. 大散形花序の柄は無毛平滑

N. 果実の稜の基部は互いに接する. 大散形花序の柄の長さは約1cm 20. ハマゼリ属

N. 果実の脈間には平坦な部分がある. 大散形花序の柄の長さは1~4cm

O. 大散形花序の柄は10~20本. 柱下体は円錐形 25. オランダゼリ属

O. 大散形花序の柄は約10本. 柱下体は低い円錐形

P. 総苞片, 小総苞片は花柄に沿い斜上する 15. エキサイゼリ属

P. 総苞片, 小総苞片は反曲する 28. ムカゴニンジン属

6):171 淡路島一宮町産 KYO)か, どちらとも判断がつかない旨を『野草441:34~36(1991)』で述べておられたことに、『2001』刊行後に気付いた。小崎氏は『Umbelliferae of World』に基づき, この2種の識別には「花序の分枝の有無が有効らしい」とし, 「分枝の認められない」長生郡, 江東区, 一宮町で発見されたすべてが*H. vulgaris*とも見なされ得るといっているのである。

小崎氏の指摘にあるように『山田洋 1985 水草図鑑』では「ウォーターマッシュルーム(*H. vulgaris* L. 和名ウチワゼニグサ)」と紹介され, また, 最近刊行された『清水・森田・廣田 2001 日本帰化植物写真図鑑:224』には佐原市付近に生育するチドメグサ属の植物の写真を掲載し(TNS539441と同一の場所で撮影されたものか否かは不明), タテバチドメグサ*H. vulgaris* L.と記載している。

今回, 鎌倉市笛田の夫婦池で筆者が観察した植物は江東区産の標本個体(東京都江東区有明2丁目 1988.10.9 小崎昭則 KPM72956)とも上記佐原市の写真とも酷似し, 同種としか思われな

いものであった。そこで, TNS収蔵の*H. vulgaris*と*H. verticillata*の標本, 原産地の文献等により, 混同されやすいこの2種について検討してみたので報告する。

これらはともに温帯~暖帯の水湿地や水中に生育する多年草である。国内に自生するチドメグサ属と異なり, 2種ともほぼ円形の葉が葉柄に楕状につき, 花は花梗に輪生状数段につく特徴が共通する。2種が生育するヨーロッパ(内1種は帰化)では花梗と葉柄の比率, 掌状脈数, 果実の基部の形を区別点として挙げるが, 標本からは下記に列挙する相違も観察された。

H. vulgaris: ヨーロッパ原産。葉身は径1.5~4cm, 掌状の脈は7~11本, 輪郭はわずかに横広楕円形, 丸みのあるごく浅い鋸歯はオオチドメのそれに似る。楕円形の一ヶ所がやや深く裂刻するのがあきらか, その対面に最も長い脈が通り, それを対称線として左右相称の葉形, 脈の走り方となる。表面は無毛, 裏面脈上に粗い立毛が疎生する。葉柄は3~25cmで上部に開出した粗い毛があるか, ほぼ無毛。花梗の長さは葉

柄の1/2未満、開出した粗い毛があるか、ほぼ無毛。花輪は1~3段につくが、各花輪の間隔は1~5mm。輪生する花柄の長さは0~1mm。花序軸が稀に枝分かれすることもある。果実は長さ約1.5mm、幅2.5mm、基部は心形。分果の側面中央はほとんど窪まない、表面に紫紅色斑と微細な粒状の凹凸が見られる。

H. verticillata: 北アメリカ原産。葉身は径2~8cm、脈は8~14本、輪郭はほぼ円形、丸みのあるごく浅い鋸歯が均一にあり、裂する部分一ヶ所はさほど深くない。脈は中央から放射相称に伸びる。両面とも無毛。葉柄は5~40cmで無毛。花梗の長さは葉柄の2/3~同長~やや長く、無毛。花輪は2~7段につくが、各花輪の間隔は5~60mm。輪生する花柄の長さは1mm~10mm(母種はほぼ無柄、var. *triradiata*は有柄)。花序軸が1本のことも分岐し2本~4本になることもある。果実は長さ約2mm、幅3mm、基部は円形~切形。分果の側面中央の窪みは顕著、表面は明褐色でほぼ平滑。

開花期~結実期の植物体の外観では花序の違いが最も目立つ。*H. vulgaris*の花序では、花輪の間隔が詰まり小花もほぼ無柄のため、一見すると頭状花序あるいは短い(1~1.5cm長)穂状花序に見える。一方、*H. verticillata*の花序は長く、花序軸に数cmの間隔で極めて疎らに花輪がつき、var. *triradiata*の場合は斜上する不同長の花柄があきらかである。また2種ともに花序軸の分岐は稀にあるらしいが、それを示す標本は収蔵されておらず、単生する場合の多いことが海外の図鑑類のイラストからも読み取れる。

大滝氏により『1980 日本水生植物図鑑:42~43』に詳細に報告されている長生郡の植物、湧水が流れ込む岸边に繁茂する鎌倉市の植物、未熟な果実が多数付いた江東区の植物標本、これらは3点ともに全体無毛、11~12本の葉脈、葉柄とほぼ同長の花梗、明瞭な花柄、切形をなす果実の基部などの特徴から*H. verticillata*と判断できる。

村田源氏により*H. vulgaris*と同定された一宮町の植物は、「小林禧樹 1989 レポート日本の植物38:179」に標本シルエットが掲載されている。花茎はやや短い花輪5段はかなり広い間隔で花序軸につき、果実は花序軸から離れて見える(花柄が数mmはあるらしい)。村田、小林両氏の2報告とも、セリ科の同定には欠かせ

ない果実の形態が一言も記録されていないためKYO収蔵の標本を精査する必要はあるが、これも*H. verticillata*の可能性が高いように思われる。

『写真図鑑』に載る佐原市の植物も、その写真の像からは葉脈の本数、花梗の長さ、花輪の間隔など*H. verticillata*の特徴とよく一致し、『日本水生植物図鑑』で大滝氏の描く「葉身部の正の屈光性」を示しており、これもまた*H. verticillata*ではなかろうか。

以上から、少なくとも上記の地で生育するチドメグサ属帰化種はすべてウチワゼニクサ*H. verticillata* var. *triradiata*一種であって、その中に*H. vulgaris*は含まれていないのではないかと考える。

文献

- Hiroe M., 1979. Umbelliferae of World. (p.95~97, p.103~107, p112, p114.)
Correll D.S. & H.B. Correll, 1972. Aquatic and Wetland Plants of Southwestern States. (p.1214~1219)
Gleason H.A. & A. Cronquist, 1991. Manual of Vascular Plants of Northeastern United States and Adjacent Canada, Second Edition (p.368~369)
Shishkin B.K., 1986. Flora of the U.S.S.R., Vol. X VI. english ed. (p.43~44)
Cannon J.F.M., 1968. Umbelliferae, in Tutin et al. Flora Europaea, Vol. II (p.319)
Pignatti S., 1982: Flora d'Italia, Vol.2. (p.171)

相模湖のツガ

(金井弘夫)

津久井郡藤野町日連で2001年3月18日、球果をつけたツガと思われる大木を遠望した。場所は相模湖の南側139° 10.5' E, 35° 36.2' N, 374.2mの三角点のある頂上の北西側で、現地では「宝の峰」と、小さな木札がついていた。近くの石老山や東京都高尾山、陣場山にはあるはずなので、別に気に止めなかった。ところが『神奈川県植物誌1988』(以下、植物誌88と略す)を見たら、この地区(藤野-2)には分布点が無かったので、3月28日に標本を採集しツガであることを確認した。胸高直径57cm、樹高12mの一本のみで、モミ数本と共に伐り残されたものと見られる。標本はKPM, TI, TNS, MAKに納める。

KPMで標本を見せていただいたところ、石老山460m(高倉誠之.1998, Mar. 29)の標本があった。また、生藤山(森茂弥.1982, Aug. 31)の標本(

枝のみ)があり,ツガと同定したうえ,「コメツガとの雑種か?」と付記されていた.この標本は枝が僅かに有毛なので,植物誌88ではコメツガとして扱われたのかも知れない.実際同誌の藤野-1には,ツガではなくコメツガの分布点がある.生藤山は1000mを超えるから,高度としてはどちらとも言えず,確認できる標本を採るのがよいだろう.

なお植物誌88では藤野-2にカヤの分布点が例外的に無いが,現地には普通に見られた.これも今回KPMで調べたところ,藤野町菅井400m(松本直樹.1998, Aug. 31)の標本が入っており,念入りな再調査に感銘を受けた.

「神奈川県植物誌2001」で新たに記録された植物と絶滅した植物

(田中徳久・勝山輝男・木場英久)

「神奈川県植物誌2001」(以下「神植誌01」と略記)は,神奈川県新産の植物や,「神奈川県レッドデータ生物調査報告書」(1995)などで絶滅種として報告された植物が再発見されたものなど,多数が掲載されている.また,「神奈川県植物誌1988」刊行後も記録がなく,絶滅種として扱われた植物も多い.ここでは,「神植誌01」刊行後に公開された正誤表(2002年2月版)の内容も含め,これらについて整理した.なお,「神植誌01」(正誤表含む)で見出しとして掲載された植物は3,179種類(*印で示された参考種257種類は除く)で,うち178種類が雑種,変種相当以上のものは3,001種類です.また,そのうち自生種は2,321種類(うち雑種が152種類),帰化種(国内帰化も含む)は858種類(うち雑種が26種類)となっています.

以下は,「神植誌01」(正誤表含む)で見出しとして掲載された変種相当以上の分類群(雑種は除く)3,001種類を対象としたもので,「神植誌88」刊行後の調査結果,知見にもとづき,一部学会誌等に既発表のものも含めて扱いました.

1) 新たに生育が確認された植物

(1) 自生種(150種類)

神奈川県新産(66種類):シチトウハナワラビ,フユノハナワラビ,ヤワラハチジョウシダ,ニシノコハチジョウシダ,クルマシダ,ヤマドリトラノオ,ホソイノデ,オトコシダ,イヌケホシダ,サ

キモリイヌワラビ,コシノサトメシダ,ルリデライヌワラビ,コクモウクジャク,ニセコクモウクジャク,シマシロヤマシダ,ホンゴウソウ,キヨスミギボウシ,チャボチヂミザサ,イブキザサ,イヌトクガワザサ,センダイザサ,ケスエコザサ,オオシダザサ,カガミナンプスズ,タキザワザサ,イナコスズ,シブヤザサ,ケネザサ,ヤマトミクリ,タチヒメクグ,ヒメアオガヤツリ,クグテンツキ,スジヌマハリイ,ハタベカンガレイ,コミヤマカンスゲ,マメスゲ,ヒメモエギスゲ,オキナワジュズスゲ,スナジスゲ,ムカゴサイシン,カゲロウラン,ミヤマイラクサ,コケミズ,トキホコリ,ツルマオ,コガネギシギシ,ナガバノヤノネグサ,ツルソバ,オオツルイタドリ,ミドリアカザ,コバノボタンヅル,イワカラマツ,モミジカラマツ,ナツツバキ,トリアシショウマ,ナツフジ,ヨツバハギ,ヤマアイ,ビンゴムグラ,シマクサギ,ミヤマトウバナ,ヤマホオズキ,オギノツメ,ハクサンボク,ツルギキョウ,ハマサワヒヨドリ.

絶滅種等の再発見(61種類):スギラン,マンネンスギ,エゾノヒメクラマゴケ,ナチシダ,ヒメイワトラノオ,シノブカグマ,ミヤコイヌワラビ,ウスヒメワラビ,イワヤナギシダ,クロモ,ヒロハノエビモ,イトモ,イバラモ,ホソバナアマナ,オオキツネノカミソリ,ヒナノシャクジョウ,ニッコウコウガイゼキショウ,アワガエリ,ナガエミクリ,アオテンツキ,サギスゲ,コイヌノハナヒゲ,ヤガミスゲ,ジョウロウスゲ,カモメラン,ヒナチドリ,ミヤマモジズリ,ムカゴソウ,コフタバラン,トキソウ,ヤマトキソウ,アリドオシラン,ツリシュスラン,アケボノシュスラン,フガクズムシ,イチヨウラン,キソエビネ,ナツエビネ,セッコク,クモラン,オオバヤドリギ,ヒノキバヤドリギ,ミヤマツチトリモチ,リュウキンカ,ベニバナヤマシャクヤク,コキツネノボタン,ハスノハカズラ,センリョウ,ウスバサイシン,コンロンソウ,コガネネコノメソウ,イワタイゲキ,ウシタキソウ,ハナビゼリ,ヒカゲツツジ,サカキカズラ,ウスユキムグラ,クチナシグサ,ハマウツボ,ミヤマシグレ,サワオグルマ.
新しい分類体系による再認識(23種類):ウスイハナワラビ,ヒメオニヤブソテツ,オキナワハイネズ,ツツヤナギモ,タチアマモ,イトイバラモ,エゾヤマカモジグサ,フシゲチガヤ,ツルナシコアゼガヤツリ,ミツカドシカクイ,ヒカゲハリス

ゲ, ツルミヤマカンスゲ, イセアオスゲ, イソアオスゲ, ホソバアカザ, タンザワウマノスズクサ, ハマオトギリ, ミウライボタ, ヒロハスズメノトウガラシ, エダウチスズメノトウガラシ, イスタヌキモ, モトタカサブドウ, ハイニガナ.

(2) 帰化種(200種類)

日本新産(62種類): コゴメイ, セイヨウウキガヤ, カシュウコメススキ, フユヌカボ, ノゲエノコロ, ホウキアゼガヤ, アンデスカゼクサ, ホガクレシバ, アメリカノキビ, ホソナルコビエ, ゴマフガヤツリ, アレチクグ, ホソミキンガヤツリ, オウギシマヒメハリイ, ヒメクロアブラガヤ, アメリカミコシガヤ, ナガバアメリカミコシガヤ, ヒレミヤガミスゲ, スベリヒユモドキ, ヌカイトナデシコ, ミナミハマアカザ, サケバミイヌガラシ, ホソミナズナ, ハートナズナ, オオバナナズナ, ダイコクマメグンバイナズナ, マルバオハツキガラシ, ヨコハママンネングサ, ハイキジムシロ, ハクモウアカツメクサ, トックリツメクサ, クシバツメクサ, アレチノエンドウ, アメリカカキカシグサ, ウスゲヤマニンジン, アメリカクサレダマ, マルバフタバムグラ, コメツブヤエムグラ, ツタノハルコウ, アレチウシノシダグサ, アメリカキューリグサ, ダキバアレチハナガサ, アメリカアワゴケ, モミジバヒメオドリコソウ, キンギンナスビモドキ, キダチハリナスビ, ヒメケイヌホオズキ, オオイヌホオズキ, ヒロハフウリンホオズキ, アイフウリンホオズキ, ホソバフウリンホオズキ, キバナホオズキ, ウスゲホオズキ, ヒメツクバネアサガオ, ハイオオバコ, シロノジシャ, アレチボロギク, ダイコクサワギク, シンコウサワギク, ハナヨモギギク, スマツルギクモドキ, ワタゲツルハナグルマ.

神奈川県新産(138種類): モエジマシダ, ナガバオモダカ, オオセキシウモ, ホソバオオアマナ, ナギイカダ, アメリカコナギ, アメリカクサイ, コバナノハイゼキシウ, ホウライツユクサ, アレチイネガヤ, アレチタチドジョウツナギ, ツクシスズメノカタビラ, ミナトカラスムギ, ヒメハルガヤ, バケヌカボ, ホソセイヨウスカボ, チャボチャヒキ, ホソノゲムギ, テフ, アフリカヒゲシバ, コウシュンシバ, コヒメビエ, チクゴスズメノヒエ, フシネキンエノコロ, イタチガヤ, チャボウシノシッペイ, ミナカミザサ, ボタンウキクサ, ヒノウキクサ, イボウキクサ, モウコガマ, シュロガヤツリ, ユメノシマガ

ヤツリ, セフリアブラガヤ, ダンドク, コゴメミズ, ヤンバルミチヤナギ, ホザキニワヤナギ, オオイタドリ, ウスベニツメクサ, ヨツバハコベ, オムナグサ, アライトツメクサ, シロミミナグサ, イヌコハコベ, ドウカンソウ, イタリーマンテマ, ヒロハノマンテマ, シラゲホウキギ, ヒロハヒメハマアカザ, イガホビユ, ツルノゲイトウ, ホソバツルノゲイトウ, ハイキンポウゲ, ヒメミヤマカラマツ, ハゴロモモ, オオカナダオトギリ, シラユキゲシ, セイヨウワサビ, ゴウダソウ, トキワマガリバナ, ダイコンモドキ, ミチタネツケバナ, コタネツケバナ, オオヘビイチゴ, オジギソウ, アメリカゴウカン, ダンゴツメクサ, ジモグリツメクサ, キレハウマゴヤシ, モンツキウマゴヤシ, トゲナシウマゴヤシ, ネビキミヤコグサ, ワタリミヤコグサ, オッタチカタバミ, ヒメフウロ, チャボタイゲキ, ショウジョウソウモドキ, コバノニシキソウ, アレチニシキソウ, ナガエコミカンソウ, ハリヒメハギ, ヤノネボンテンカ, ニシキアオイ, エノキアオイ, ナンゴクヒメミソハギ, コメバミソハギ, ヤマモモソウ, ウスゲキダチキンバイ, アメリカミズユキノシタ, ヒナマツヨイグサ, ウチワゼニクサ, ゴウシュウヤブジラミ, コバンバナスピ, ベニバナセンブリ, ハシカグサモドキ, タマザキフタバムグラ, メリケンムグラ, ヒロハフタバムグラ, ゴウアサガオ, ハマワスレナグサ, エゾムラサキ, ボタンクサギ, ヒメクマツツラ, イケノミズハコベ, ヨウシュハッカ, オキナワクルマバナ, セイヨウウツボグサ, ニガハッカ, ヒラナス, トマトダマシ, ビロードホオズキ, ハリナシチョウセンアサガオ, ツノミチョウセンアサガオ, ホソバウンラン, オオマツバウンラン, アレチキンギョソウ, タケトアゼナ, ヒメアメリカアゼナ, ツノゴマ, ニチナンオオバコ, アマハステビア, ベニニガナ, サンシチソウ, コウヤカミツレ, メリケントキンソウ, ハイイロヨモギ, タカヨモギ, ヨモギギク, イトバギク, スマツルギク, アメリカタカサブドウ, ジャノメギク, キクイモモドキ, ワタゲハナグルマ, ナタネタビラコ, ウズラバタンポポ, コウリンタンポポ.

2) 絶滅種(144種類)

自生種(116種類): ヒモラン, アスヒカズラ, ヒモカズラ, ヒメハナワラビ, ヤマソテツ, シシラ

ン、アオガネシダ、シムライノデ、ナンカイイタチシダ、ツクシヤブソテツ、タチヒメワラビ、ノコギリヘラシダ、イワダレヒトツバ、ヤノネシダ、シラビソ、サジオモダカ、マルバオモダカ、スブタ、シバナ、ガシヤモク、カワツルモ、イトクズモ、ムサシモ、ホンゴウソウ、キバナノアマナ、ミズアオイ、アヤメ、カキツバタ、ドロイ、イヌイ、ニッポンイヌノヒゲ、ヒナザサ、ケスズ、ヒンジモ、チャガヤツリ、オニガヤツリ、イヌクログワイ、ヒメハリイ、スジヌマハリイ、ヤリハリイ、シズイ、ノグサ、マメスゲ、オオタマツリスゲ、タチスゲ、ウマスゲ、アツモリソウ、ダイサギソウ、ムカゴトンボ、フジチドリ、ノビネチドリ、コバノトンボソウ、キノチドリ、ヤマサギソウ、ヒメフタバラン、ミヤマミズ、マダイオウ、クリンユキフデ、サデクサ、ナガバノウナギツカミ、ヤナギヌカボ、ヌカボタデ、ハマアカザ、ヒキノカサ、オトコゼリ、ノカラマツ、ジュンサイ、ヒメコウホネ、ヒツジグサ、アゼオトギリ、ヒメオトギリ、イシモチソウ、ハナハタザオ、ハクサンハタザオ、ハマハタザオ、ホソバノキリンソウ、イワレンゲ、サガミメドハギ、ノウルシ、ミヤマクマヤナギ、ミズキカシグサ、ミズユキノシタ、フサモ、タチモ、タカノツメ、エキサイゼリ、ドクゼリ、サワゼリ、オオヤマツツジ、レンゲツツジ、タイミンタチバナ、アサザ、ガガブタ、ミツガシワ、チョウジソウ、クサタチバナ、オオバノヨツバムグラ、ハナムグラ、ハマネナシカズラ、マメダオシ、カイジンドウ、ヒメハッカ、シロネ、アシタカジャコウソウ、クガイソウ、ゴマクサ、ママコナ、オカウツボ、ミミカキグサ、ホザキノミミカキグサ、ニッコウヒョウタンボク、カノコソウ、シデシヤジン、クサヤツデ、テイショウソウ、オオニガナ。

帰化種(28種類):ヒロハウシノケグサ、アカザカズラ、ハナハコベ、ムギセンノウ、フクロナデシコ、アメリカアリタソウ、ハマフダンソウ、セイヨウキンポウゲ、アマナズナ、ナタネハタザオ、キバナスズシロモドキ、イタリアソウ、ツメクサダマシ、ヒナツメクサ、トゲミノウマゴヤシ、ウズマキウマゴヤシ、オニカラスノエンドウ、オトメレンリソウ、ヒゲレンリソウ、ナガミノセリモドキ、タマヤブジラミ、フランスゼリ、アレチムラサキ、ハリゲタビラコ、ハイオオバコ、ヒレハリギク、キダチノキツネアザミ、ムラサキイガヤグルマギク。

2001年度総会報告

(事務局)

2001年度の総会は、2001年7月20日(祝・金)に神奈川県立生命の星・地球博物館のミュージアム・シアターで行われました。総会の受付で、刊行されたばかりの『神奈川県植物誌2001』を配りました。会員のみなさんは、重い植物誌をひざに乗せながら、総会に参加しました。

2000年度の事業報告、決算報告がなされ、2001年度の運営体制、事業計画、予算が審議され可決されました。

●2000年度 事業報告

●2000年度 決算報告・監査報告

●2001年度 運営体制

●2001年度事業計画

●2001年度 予算

『植物誌2001』の正誤表の入手方法

(事務局)

会員のみなさまには、すでに『神奈川県植物誌2001』の正誤表を配布いたしました。たとえば、会員外のご友人などで、植物誌をお求めになられた方がいらした場合など、下記の2つの方法で入手できますので、ご利用ください。

ひとつはインターネットのホームページでPDFファイルをダウンロードできます。下記URLにアクセスしてください。

<http://nh.kanagawa-museum.jp/wnew/plant/index.html#2001>

郵送を希望される方は、宛先を明記し、120円分の切手を添付した角2版の封筒を同封のうえ、〒250-0031 小田原市入生田499 神奈川県立生命の星・地球博物館学芸部 田中徳久までお送りください。返送に時間がかかることがありますが、あらかじめご了承ください。

編集後記

植物誌刊行後、編集担当の気が緩んでしまい、1年間のご無沙汰でした。今後もどしどし投稿くださいますようお願いいたします。